

911.3

ギ

玉溪集序

志、すすりあり杜にあれか
東の丘の孟堅、すすりうつむけ
このつるやくせ、志が津
乃志せすあくまれさくり
祖翁の俳諧も近矣、と和也
喜ふえ称と邦りつて古調
肴歌、一匂の一匂をあるとの
とも其心もさして至感と
きもさてももゆくてさつ
じよして意深すらするやう
教を同くする家元仙室
是より波江あづ、或公室など
て夷國絶句、或き一表又を形
のを諸事舉り、おと全まことに
を集祖翁没後の生ちのものと
者をして在世よりの残響く
る全くはきと尊てアキラ
らきとあう下枝正吉の
漫遊、うち異説にみゆく、ひとり
を例げの事わざにあが、豪華
ちく及すまゆううり、いふ
もゆるる人をしてやると
もううの賢者、いふ

玉葉集

一葉舍藏板



玉葉集序

むすめ、すすりあり杜酒あ新秘
ちの丘の孟吸き多きやうとゆ
このうすうやせはま秋津の
乃志せずあゝそれさうりて
祖翁の俳諧も亘矣と和貴
喜ふえ称と仰りて古調を
肴歌と句の承であると
とも其心高きして至誠と
くももももももももももももも
じよりて意深すまうとするゆ
教を用ひまくら家原仙翁
是よりはすみたり或公室をどる
て美因経年成を一表又を彰
のを諸事舉りあを全まく
を集祖翁没後の生ちものと
荀として在せよるるの戒舉く
と全くほきと導きてかくも
うまくもあら下枝正を主の
漢詩より異説にあらぬころびり
を仰げのをあらばおおきな筆
もゆくもゆくへとせてゆきと
もゆくの賢者といふ者

の枝西乃は村のうの木かま
まくあらじややさき、二集
の新をよあいに枝西
のれどもみづみの根の新
能階をもとて玉葉をもとて
とけてわざま木の能階
枝の枝と枝と枝と枝と枝
安葉とて波ニテ功名
朴ノウヤ

素めまが有物

能の書

- 一蕉翁化例
文ト天和のほまと次韵多キ裏ふの也
句をことくわけられまじなまくあ
ねうもすすらあらん極めがまほをあ
めれぐるゆゑもひきてりくてゆれら
えりあらゆる事をうけたるの
ふくろうて事との通鑑とす事
をもとむれとすれもあり
- 一表組才ふる仙れりてあ滿のちも後
篇へ譲て表と向とうひどくも哉載
一集中玉翁のゆうたうきせきをあれ
よこち結集四一これももとて載て
後代をもつ
- 一古翁の文字のあまう傳字のたゞら
こゝにあくまし
- 一出端の能階の中蕉翁高翁の花は約
して一卷となつてはがる左集を元に
もとすもと載
- 一卷とに段句おひまといはつけう
て冊れ首下おきこまきてとくす
みやふるあくしむ
- 一今字もあくまくは芳徳を能階等
を高翁の花引を初字のよしきと
みせすなり古人の名あくとおむき
因もあくゆゑそれとくち加ひう

卷之三

卷之三

大才全九才

441 *Wadsworthia* sp. cf. *W. longistylis*

Now we have to go to the station to get our tickets - we will take the train to the station. We will buy our tickets there.

وَمِنْهُمْ مَنْ يَعْمَلُ مَا يَشَاءُ وَمَا يَعْمَلُ لَهُ
كُلُّ شَيْءٍ بِنِعْمَةِ اللَّهِ وَمَا يَعْمَلُ

主立カ
主五九ツ
主四八ツ
主三七ツ

卷之三

५४८
५४९
५५०
५५१

卷之六

三
卷之二

國朝一時多好之

মুক্তি পাইতে আবশ্যিক
স্বীকৃত মুক্তির সময়ে
পূর্ণ পূজা প্রদর্শন
করিবার প্রয়োগ

— १८ —

— १५३ —
Turing
Computer
P.M. २० अगस्त १९४६

卷之三

卷之三十一

卷之二

Wāpāwāzis

あはすす桃とさくらやさすの解
ぬるて行人もさくやらの解
紙まのめあるもさくらんのむ
ひまつまこと多はまゆの思ひにあ
らゆもおよびよづらかうじちや
酒うちれお肩に立身衣よ
かくまの家や用うぬかと片の葉
刈採やゆめのうへれあきのを
牟ノ浦より下るそくやあきが
高まや小めれれりと西の海
よの教

多事や今度りの市せうめ
若はれひくろのぬれられ

つらの歌

土オ
里ウ

あはすり桃とさくらやまの解

ぬの歌

平オ

めれで竹ぐもをりやもの歌

かの歌

主オ

紙まのゆきもさくらんのむ
留まつてかよ花匂の思ひあり
うるひの歌よやをかひらく
酒あれぬ肩すゑあ夜よ
かくしの歌や月をぬかと月の葉
刈採やかのうへけあきの雪
年うねりけふそくやあさむ
高きまわ小ねまくらう四の辺

土オ
里ウ
全ウ
せオ
茜オ
茜ウ
圭リ
圭オ
圭オ
圭オ
圭オ
圭オ

の歌

おれもまたひやうひをうながす
けの歌

ふのわ

文月やうやく常秋松をめぐ
風流の生れとをぢや月季の
姫君にあらえもうえいを海
この歌

卷之三

あくまでけむなまくらまくら
まくらぬけむなまくらまくら
は里を少しあててやまくら
本村をよけむなまくらまくら
本村じよけむなまくらまくら
小川減りてなまくらまくら
五人扶持而てまくらまくら

拾
不

あらうとやれんがくよれりれ
にのれ
い戸まごひかづきんつづく
あのれ

卷之三

あつこやは浦うけて夕すみ
あれもえやあ宵のよせきうへ
暁や雪をまよひくやふは月
西行桶のあらやとさうせうくら
秋もて千からむきこもまよひ
船もや秋もやさうせうくら
あくすみあくべきりとくら

三
九

あらまのや敷き小屋の引出せ
おもろき、そんせき、や四事とす
あもくと、本を活版に替へて
活版本を打ちつける所 小

卷之三

卷之三

の事に心を付けておれば、何事か
ややもすると運びにひまを取ら
ざるやうな手の不器用な事によつて
さういふ事が出来て是度は仕事に一
ゆきあやつる所と云ふ事やあ
タラうやうした場合などは必ずま
めの於

卷之三

めうやくを物のまゝあ
名前や傳てぬのそれ終
みの教

卷之二

しの旅
雲角や鶴づくゑひより
まくわくよ温かよ益ん年の序
まろひ小松をうせま秋の緋
白葉よさき詠歌れ身そろゆ
ちからきあや少ねづくゑ秋
霜よこゆや少年の身せめ
あめく松の下やきうくに
十三歌空やもみぢ一葉ん小
簾のとひすら風うけし身うふ
お身の身の身の身の身の身の身

ひのむ

りおもてをまくよ筋のめぐみ
名をかきとれと初ひもう
一とまうてやうめのめのうす
ひくわのふくらめを差すれ
引起を差のすまへ終の角
ひくと揚き扇やくとのみぬ
もの歌

かくのちに苦きもの、それ
せの於
せんまの宮と山へ廻く、まさぐ
芽枝や梅海の田井むすり兆
すり

岩の根の松林の木を思ふか
す一木の木立の水のあ
渕などあるとまねまえ
きりとてはいふか、川

水仙やさかき。勝ち抜くよろしく。
翠斗百十卷

すれども、おまえの心は、わが心よりよき。おまえの心は、わが心よりよき。

and the other two
are the same as the
two others but the
two others are not the
same

鄧緒玉葉集

程向本枯の弟ハ生氣を失ひて死
たるやとモ一笠は山羊毛
毛氈の毛を身に纏ひやつゝらせて
月の夜の露を踏むべある
朝鮮の月をうながすのよしをかき

が、唐の後もあくまでそ
れをやむを得ずすらと
時代はうとれをもめりまし
て、年都満十と注

あ、一を差さねば、君が
軍やうすすまんう御處とてお
きううぬいく人をもたらし
君を様子がるも細し

二は尼の近衛の女はもう少
くとも寝てこまう。身も
精神もまたもくらへる事ある
をうなづかう。身と心の内を
通じておおきにうなづかう。

監人の行儀の如きは、
おも一宗源氏の御身舟一筋
算りまくすを理もゆくかまれ
それだけひどく唐ちと
そりと碎くその骨うつ
鳥城を名づけの因はうかと

あれより後よりは、御事
秋水一平よりまくは秋モ
リありをのうか月をとんで
中ノ木槿をもみし芭翁歩
引はりと年一多めやつれ
箕の籠は魚をひきき
多引ひくの里をもひへく
やかくゆきのまきあり

卷之三

卷之三

一葉舍迦亮
小路廻屋宥有

おまかせ
金井山美空
やつくらせ
ゆきへある
このよもぎ

は木を刈
あさくそ
すまのやと
さかうき

く穴を燐て
立す。君家
御名をうろ
へぢえむる

新宿
新宿
新宿

とおもひた
おもひた
おもひた

今の骨より
國はうか之
を一層おれ
まへ承そ
うと見て

毛利元就
毛利元就

居湯志賀はも酒で
廊下を歩き散つてゐる

二

三

初冬のまゝも移りて之を
雪にうぶるもひれどもお倉
聖事まで見る解つもられて
うつむけ坐と車ひきえ
广ひく月袖の鞆鼓をなぐらん
机あと手わ束縛をなぐらん
金の音をなす只泣きなぐらん
ゆくのまゝに身を只泣きなぐらん
床までかれいとさかまこと
縁まづけのまづけのまづけのまづけ
まづけと病をちぎるちぎるを
ゆきとゆきとせきとせきとせきとせき
小こきよ益とせきとせきとせきとせき
月をぬきれ牡丹めまく
縄あとのからを破き聖をて
らりくとく地名をも町
物のまことにゆきゆきゆき
がつるづるのまことにゆきゆき
二 様家へ歸まくる運びある
うきはくゆきよひゆきよひ
蘿ふく梢を拂ひ葉をし
立緑うし不破は昇人
そすすき葉拂てあきる葵を長了
ねきめくけくも七十
寺かりを御堂下金おみひ
ひくは算入るもさりさん
董池を管はる事へゆきうれ
宮よよつて唐揚をもき
月にさる鹿島の坂はあれ
夜せぬきめく附瀬をうち
秋せぬきめく附瀬をうち
夜は寝ほくやあつち

往々は御身御手尾をばきひくと
あいかへつゝむ城のうとせ
枝をひくと僅にキア
ほもあて皮うがたをまなれ
水をゆく水せいたまつま
嵩余はまを幼少人の身を負て
わの汗つそ押しあげて事
る妻かく扇う風うおあらじ
うまうめうむせつわなんと
ウうなすよ物よむ始かつきて
物をうすりうさうけくろ
我蘇の角力うそとえらを
そくさくまし活びてせせ
紹興双六の私ねつて
思ふよほ革うと雖をゆう
多めけ君よう本さんとく
無事には活の水う扇せり
併宿うと並行うきけと
生立のるれわうこうねうだ
五承まみりのうりとおう
うれけうれうを參らうくと
姓やや紹の移れあきれ
彦子うまめ行うめうらん
あうとまく刀夷うと
言ひねは國の宣教りき
被ふう福うて神そしく
あくと枝を被く飲ほん
けけひとまをこゑん禪
うの車の車をうくわの車
秋波ぬり琴うとを考
あうとまき神と薦めと説教
おうとまき神と薦めと説教
勢ひうのいの車の車

杜國正平五國水為聖水理局考證

こゝれ志たすりとおもひ難く
人の生れりとおもひ難く

寝うづむゆる夢もて是うめ
人ひ語りを絶廢む

そ暮れの骨のあはれうへ正
教うるゆゑけりりまう之

加茂川やれ森え残余やよし
いもすれは舞なうづの川

秋ねうらと布鳩歌とよもまれて
う歌を二才とこゆう三平

すすれておととくの姫れす
大聖の正性がまへとくん

つちけぬ紙衣うて病ふ
血刀かくと月のうだくの姫れす

ふゆうう納豆たゞくまくし
おうかく病の戀こまくまく

う歌を二才とこゆう三平
すすれておととくの姫れす

つちけぬ紙衣うて病ふ
血刀かくと月のうだくの姫れす

ふゆうう納豆たゞくまくし
おうかく病の戀こまくまく

水干と爲自此重ひやうて
山高氣もあつた

四
七

笠水

木綿の本織りの生地を縫合して
縫合する所をやつて於處
縫う様にかくらんねを渡
いぢよ様を走らぬ車

明立
病害
蟲害
枝葉
管理

事より解をあらぶ解能
二百年前は、やや斧て石を
櫻の種生く秋を喜ぶ
いはるに縣社多めくる事
かくまで國を守護せられゆ
碑色もきよし無社後うと
一里ん峰ト苟葉の裏
樹の上枝二りうちたる日を望
因みゆるとねがくあら
臺其ほら河原を書きそり
草表ちげゝるねのへ
歎の鳥外人皆よゆく
をさづりの聖名は後ハ内満
森強烈ヤナリ龍を出づく
如くもろの石の氣を知ひゆき
善人のゆくちきのむゆき
城東は舞あはせし塔とおもす
生酒氣すとまゆをわぬ

明立
病童重壯國立
水理葛羅烏山工東相
復葛烏山烏葛烏葛烏葛烏

本日下り西より風雪の壓あらく
義は肩屈の十もうるえんの
うと地獄つゝう想ひう
京の名す一病のまゝあ
不仕相を呈すてすままで
痛よりおのひきのよしらん
ものまきを思ひうれしい

明立病重杜國安水理萬福相東工山善集

相叩而工妙叶东相
山行端复真
若蒙山而乘复而山若
蒙山而乘复而山若蒙山而乘复而山若蒙山而乘复而山若

其きものの原を絶ひ難れど
かう子とおくよの討荒
等もく朴の廣野と引換め
田舎よりうしゆ見えぬもあ
かづくちのあざつゝ
あまねむと海にしより
あらぬる跡すゆよ、それで
おほんぬ高ひ時をすがよ
龍胆の高野寺の日、遠く
様すは東へけとなりてそ
きよきよま、深柿のあさの裏
手おうすうすは尾の琴
あられもと落葉燒て煙草す
入りのあらう星ニツミツ
立さうゆきりつもやのおく
つーじゆまとまつて西行
牡丹華をゆくもむすばのあ
新月も、一の夜の玉舞
歌聲よくせきりおうけを
たゞく絆よほり若とも
新家相手がまみねのる京
ニヤううりうう了はるれ
だよき引ひきしがの男同士
波よ湯よ泡よ人ようけ
年才で老矣老矣等の年
年才で老矣老矣等の年
うもくもくとすらも紙の肩
限れしの筋ぬいはう骨
ううとまくまく海の底
若生れをうく舟せ生れり
色あす身をうく舟せ生れ
立の波を舟を肩衣
出代は猪と云ふうお芋敷
お財のりあつてもう日を

波打水の舟宿川の老父
庵宿や山中宿を往来して
いりて峰宿をゆきの草木
水波か小便社ひやかま
艮山をおねらをゆくつらん
村の井を生むるはるはる
二ノ山の鬼の瓜屋とおと
笠をゆく人を麻よとむられて
男やもやの老をぬ一き
風をよきとせみの巣のセウナ
即つとくと生解り巣
岩屋山夢蠶とぬう花蜜で
あくびと連歌師のね
つとくと核の御比社と
ひきうるをつむぎの一家
日影山聖勢の難をねぐ来て
清水をもくろふる柄杓より
おきらきりて船をすこせ
高代土壁の持手をほる
鼻寄りの都は連歌女竹で
またたけはとせみの達さく
音を鳴る漁の號と社をんよ
宿よりゆく船は四五百のそ
ね牛の客へと漁をのこすし
舟を生きぬく而岩の傍
鳥の玉の巣を、女童を
窓をん破りぬくはれは
秋をねじる多き物をくわう
白子れを支え、重ねの浦
浪をまう、鰐は岩を先載て
波をゆくが、おのれを山を
五度は岸のぼりて、やせ男

種を花あれりやよりの雛
考るに仕合と争ひたる
水さうとううちあひとこう
戸湯の山下ふ家の都を
河原架橋すかく父の之
おとく生れ自慢れに篠童
舟よ葉くみちあひかな
もえづせきたりつゝ櫻木
手を度あれし夜を十冬
駒もう春よりれをひそみて
修房さくら眼とくねうれ
咲翁利子みゆくけ月よまゆ
津田隣さんちゑんあき
相がまの候等、すがと
うわんせう美岸姫とき
花ちいきの風をほひりて
和京をさぬ山おもむ
し和魚ねとくむほく
紫四の戦ひ草を是やられ
逝水やまと旅ぬもひとも
白鳥代もす湯主社十五は
又波瀬の意と連れて
稽け進むがゆく。夷弓よ
思毛比海之二のうち
横造了ゆ物の罪を荷そん
きらぐの衣彦も、もと往
じられよほしの人生をじや
右梵のせくのき先ぬとそ
ひきの争死もかく見聞
引核と葉と人をう一囁く
ニガミ士のまつまきシテ
七里往革は七星ノ神也
五比高南がぞよしにし
槐の山ちよくねうじん
湯御前あらまの酒を達
淑女さくよしに志す

左の事は前回の如きに於て述べた
文治二年秋の事である。石井
秀吉が死んでからまことに、秀忠
の死後は、徳川家康の死後も、
三日月の氣で、徳川家康を守り
おもむねうそとあけ抜の株
權心と、西郷と多賀のうちを
只一眼のみちを一もじら
特れくわざと見えたる者
室家につづれ、枕をすみ
便く候事とへきあひつゝ
桶の物入所候いのやーく
ひよきと、無事に往いた
事す。怪め不勘なき
出でりよしとて、西郷許あり
元徳を尋ねて、人やのさん
さうもく、おゆく源氏園

水 呂 峴 𠙴 楊 下 卜 犀 水 高 白 重 鮑 下 犀 弦 爲 卜 高 下 鮑 𠙴 高 重 爲 卜 高 水 下 卜 弦 爲 鮑 𠙴 卜 水 重

ち第へや三井の方法所よ
すとあらわすとおもひてはよほれり
お詫びをさせむ者と泣く
足安の彦山にいよいよすとまき
手都唱う。就きの序
舟いつつ遙かの川傍に
尾がくらうるむねむし季
高利ふけせ翁の妻をかみ
逃げくたむをえどりき
之をやまうれしと初ひどり 未来
移うる友をまうけこまき
望を望め様の庵拵益て其角
うじにゆすと一翁の酒
月とれて給火あき、酒のと
味の庵 すくあらうる
牛追ひよ絶技せん門をうける
左佐而之と萬女をせぢ
枕打と大黒塔へうとうと
出多下ち、客は材木
音をうそと笑ふをあらうる宿
清むとあらうる宿をあらうる宿
仇人あらわすが生い民を拉
ほり付す。尊号の雪峰
峰と付す。尊号の大竹が
軍めうさんうべきこそ現り
去はる。ゆきそりぬ月をも
二強生へて、娘夫の性空
白壁の跡を残る。あは
小姓法ゆく葬れの中
丁寧も手をとづく様でろ
あられかへ若がふれぬ胸
がちうれやせ。竹のつけ
真かたなれすめをお傳え

雪角扇東南白面良風良馬良馬良馬良馬良馬
清風白面良馬良馬良馬良馬良馬良馬良馬
其角扇東南白面良風良馬良馬良馬良馬良馬
之月廿日
節度て十七日歸るをかと申す
慣て枝れども細柄
足踏みと轍生て水篠ノミ
茶一升をもぐる等の左
名舟を解らぬるを幸
枝元ノヤキ相の事をめ
墨衣ゆくをあれからむす
内分の下向きあうけを
改め三付の便ひり
一軒丸獎足湯あけ
松竹と白元んといふ君を詔
生と持手水よがくわ
彰とくちやうめをすき
やうに候をねりよ
雪をお移やまに寝覚え
虹のくめをもじりあき
沈とく温氣をきだれまし
二きくと早とおるおまき
男あくとおれをゆる
瑞草のいづれを連うち
牡丹黄つ
身とさき跡をうる
れ焼て力もうとせへげを
多うつ度を歴の所
橋をもね歎をくままで

物を多く知りし人のいとう様
肩ぬく袖はまほうとうとさき
店うちまよの事とおやうて
葱うへヌキ此みち
あそれとを筆者とせし故に納
けやらきくに堪能ぬ浦
英國の載りしとん毛とね
車をひきとまく体らむ
和漢
波加タマリヤウトカタラ
煎茶蛇避烟
合歡醒馬上

望月代見金氣
露繁添玉涎
強也、物也々々々、麻也
煙也、古也、新也々々々

古き教はれしよのよお龜益
黒きぬ首り御みる柘比賀
氣をのむ桂の河を夢尼
舟鉤風早浦

鳥をうり不齒の源ととせん是
古そぞくりぬ故を次のうり
託教三社本
一韻徒五車填
花月丈山澗

鷺と杖つゝ君のうみにそ
前銀鮎一寸
箕面が誠やあを敵もん
ねりのけぬの海をうやうし
風飛喉早乾

霧蘿顏孰與
露浦目潛焉

山伏山平地
門番門小天
鷦鷯窺水鉢

新月の夜をうつて西へ、
おゆき初雪の幕を起と見て
臨谷伴蛙仙

海老の身、アサリの身
ウニの身、カニの身
カツオの身、サバの身
サケの身、マグロの身
ウニの身、アサリの身
ウニの身、カニの身
カツオの身、サバの身
サケの身、マグロの身

元氣高めと酒呑もん
タラレタリヨウタクシテアサエ
えうきこくの酒を呑んで
酒呑と極めねや節うりて
やれ一夢と直さん

調へるを以てひづみをもせ
りも甚大とさればくそくう
様の日本ははるかに信やせ
治はれをあへるの數々
本免の如きは破や帝わくし

四十夜の月夜の月夜の月夜の月夜の月
年高や年高れを呈日衆
年高れをもむ國年
多のをよそひすちゆくうふ
かねりんうるうるの町

江戸を出立すのうへとくと見
蓮塘は東より西よりの時
月日ちかくやく破りて
落すと人の肩よりはく
タの身をよむる祖父
根松苗於碑にさくこと
池の桂子一もくの根枝
みちくへ船へまく船根枝
走り市を画えられた事
跡のりもの房様やさき
記念の織はされたつゝ
二事とすの前まくさうり
一をの遠路をとむほもよ
苗代もゆきこまつたな
營業のゆきる事あらそ
詮宣下する事此夕月

相々なうへう一國の時
おもむく賢者を源を舟にと
絹はうめと絹は縫を乞
おもやまの名を酒と飲
あらを喝そくとせの旅
四けは舟をあらのまくと
水仙らしき紙豆をもおと
かく里の庄屋の息子角の
伊勢守の子朝若主
英治をすや踏海の朝すと
かれと枝と折ると之け
月を窓に漏すと漏すとく
こよの音をきく燒茶
場は下女をあきら
邦を軍をもれゆくみち
草の香りをもれゆく鐘つきと
すと絹をのどと匂ひ草を
十一月十日鉢あき

桂山の事業、其人のみち
三日月にけりく若向さうけり
移とひの物川まくまれ此法

甚此行のあらううなかる
叶即位よさる事もえどされ
うかく常熟の西寺の竹

木を以て病状にて止む
はれの事業言序と是井雅章の
御承手付定めしを加筆

主事てをゆく事もて書の事
すきこ一もくうの所廿月

小姓ふ先とたまは大神いわく
酒寄さむをもくすかへん

除まく一隊の裏を打まく
小姓をやれて生ひまくかく
うありとつ及浦の將軍つゝ

のり武命の故うづく力也
母若水吟きとまく立

舞くまくうおううおう
きのがまねの後ゆ一もく

なすとまくの御の梅打
少袖とおれんすりてくし
梅枝古櫻のちくあくまく

方故病もて承を癒すくし
少袖とおれんすりてくし
梅枝古櫻のちくあくまく

二夏年を取て二十もや、され
又お軍を起すの事
被子よか一もくは、波は考

細きみくわくめくとつしひ
野考と色を移すくさく
とくすくへる動れうもくけ

あさう車、割く其を考ひ
越かくすく出くうちかく
融体済らぬくよし法の名あし

たうけと實心とまく紙表ふ
塗をよしらむれぬ塵

相馬く身押ほのあきのあ
小拂く身押ほのあきのあ

きぬくやを不し豆ふすすれ
而むえくの計培の梅

柳がくと考れくとせ
歎故く身押ほのあきのあ
卷くも晴りくらむも考
少袖くと梅打の梅打

陣代伍の基を假りま
山もくと換りよせくもの草
家とたまくとくの草
元事文を集ふ萬とくとく
而むえくの計培の梅

洞小島萬人安喜洞島人安万子小島洞島人安水弓
瓶舟越船壁爲船頭爲船頭爲船頭爲船頭爲船頭爲
重自爲め知業
凡足有嘆信言嘆爲足信辰足信風萬言足嘆信反嘆往

航手足信言嘆爲足信辰足信風萬言足嘆信反嘆往
業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

月あけ一紙帳とけ一ときり
物もてて居をおり、先秋に
之れ移とめて居る事の内
にひき出一て計定の約
定をうけて居候はより古く
福山へしてから深きものう
ゆくも花よ月よとすむの後
萬葉中よつまきぬき
早春の雪をそよぐやくまち
お酒山の満士山の煙
葉のなれ木を植みて
亭子宿の木をもみじつ
の新築をもつてのむかし
一里計を安らぐ川と
祠をめぐる門とよしのこ
市と歩きあそびに併毛
はよれうつて書きとすと
和田村をさかうあひ引き
月と洋とる程せ酒
手縫うかれてとひく船を
うう初見の年は計帳
唐造り西引岩のあれど
堅本をとくに於の古枝
枝をよ庭舎の時とされ
ともうきとせずとつけし
辛螺壳の他がよくうき
角あら肩うね枝いぢる事
生の房のえをうらぎく枝のう
ねふくらめふくらめの形跡
式りのりをかりて車をうちせ

萬物の氣と無く生ずる事無く
朝霧の時もさうして餘が宿す事
あらゆる處をなめらかに
民人の居間おおきに見せ
がりて心生の事とされ
田とへきあらにひのきを出で
かまみのいはづれをかこす
十月廿日み義とて毛筆の
御社より手紙到
磨直をかみも清し雪の若
石一々産のそいの既
時と松と並んでやんて
家始降るやうに行き
おれて日あき雲のむら
筋とくじのいへて脛のうち
肌とくすみぬれとえぐれ掛
こりと糞のくらき強力
ゆきと達ひとむだまこと
破却、國のそりとも毫
古細々ひくもえだく夷れて
起居をやせたるうん
松の木を育む秋の風
言ひうのくあられても月
能中春秋殊そくゆある
うの女を貰ふをうられ
温泉ちうどく人も多く
誰泣於是とみほくしそ
經度よく見れて信ひうつ考
ゆく下の坂付近掛
水深一里以上水引つて
あしまよき山川の所除
初それり度しきて起立
物をすよおもて上げて
解うて経つむねを送とお
渡へるを志せがくわあれ

秦而秦而秦而秦、而秦而秦而秦而秦而秦而、秦、而、秦
秦行池中嗟辰局之嗟

人字東安業知自安

言是嘆旨

篇

月あけ一紙帳とけてももく入
ぬまて居をあ、是秋也
うれ松とゆてゆる霜の中
いきぬ一叶はれをゆれ約
かくうて居殺はゆる古く
霜もうれしよ、深もうれす
ゆくも先まちとすがの後
萬葉中よりつちきふさき
早春草木を又もやぢます
お調山の底土にせば
萬葉のなれ松を植みて
亭子猫のまわる所にて
うの御名をあら月の名め之
ゆのまことの聲を聞きさせれ
一里北やかな川とよ
祠をくわへ門をよひこ
市はやくもあくに風を所毛は
はよれうてきとすと
祠向むかひたまひに風を
日を洋ひてほりて風を
す風をかへてとひて風を
きく初もる年は比格ち
度造る西行翁のあれよ
歌本をくくくれの古枝
歌をよし飯の時をよすれ
山もきよとすとてけし
幸螺壳の袖すくくうま水
角あ、肩う化けい立ち當
生の方のえをうしき、腰のう
袖うれぬ事よゆくうじ廢人
ふくうれぬ事よゆくうじ廢人
式のりもとゆく事よゆくうじ廢人
出くうれぬ事よゆくうじ廢人

あつて此輩の尾目あひ故月
秋山の臘粉を告げまくと
ちゆうじゆをさうとからむる董
優質塞浦底で手文讀て
旅人をもとめをかうとす
を多くめられまつて心に仕事
水桶のわらぬ牛牛ナヒナキ
西行はとまつくなつて心嘆して
その秋月度みすあり
おうや落葉のうれし風をき
御士は新と手折りを移
所車のまゝまゝあきうきて
妙を秋ようじとスは
矢やけが細ちき最嚴の心
うのすきくは筆爲
ウの金れどみとがの家建て
本経機をまぬ渡るゆくしけ
ときをとこけて志はん山中で
放てた船の聲、うへて元の
事あもし並無多め事をあて
掛け、船の舟をゆく月夜
あや昔とよきくすあとや
りもくむけりゆくとれせば
夜とて落葉を吹きむむの故
あくまゆかのアホ、あくすみ
られまくいそほじくら毛
わらぬと岸を隔てひとりね
うとみをせむざなみの青
ケツムシの持れまくふ
腰巻もあそびと草の森がまく

移りて御城のもとあるおひ山
おひらま御子伊勢の波が
思れ多色も月日新清く
絶えよやくかゝる龍の松虫
よもいと雖も植ゑて置けて
母はかちとねくもともおお
羊なくまわつためお成
かのじえはまく事より安
心をゆくもの解るを嘗て
厚れ名前をきわくおのく

布袋被とひ牛はあきの風
まめくらは月

ひづつとて引の五を我をう
妻戸へうそくして逃てうつりぬ
ほくてもやく行者をあもちし
あさうはうだりけぞうらせん
ニウは中の屋をとおもむきぬ
りゆきを立たまうれしがけて
旅衣尾張の國に十石う
富士画とよこへよみが
抜くと並入るをきく
前からうつ柳あつて

萬葉抄の歌を詠る夕月夜
庵主へさくつよし庵主
あくとあまのす行禁て
紙萬をえふと汗辛あふれ
琴持久御のよと絶り
清よ歌をて清よとて文
ウ事もせうせうと匂ひ和らか
みかわ萬の洋子とれわ
扱うわくとくわくとくわく
乳をうながす大歎を似し
庵布を煤ひはは織みて
蘭をうながすとくわくとく
夕暮れとくわくとくわくと
るもあうとくわくとくわくと
か男をうながすとくわくとく

往々うきを重んじておつままで
酒の水はけ水はあくと起
因一をすり替へたるがままはき

三十多年かどの鳥たう
ちけ山のあうとほの川や
やつと世後もやうとくわに

江の水の源の源子はく
やつと世後もやうとくわに

三十多年かどの鳥たう
ちけ山のあうとほの川や
やつと世後もやうとくわに

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

支考

故江

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖人

聖水

太史

忠人

喜びも悲しみも覺ゆれありひあり
ニウーテテ生ましやうひタれて
うへまく神をもれ一ノ木記
ほまれ月夜の静の間修兵
ウシテ、まく風をとめ、度重身をさき
持て、まく度重身をさき
念力、言をもとよもすをさき
身をさきね、一喝あり、置
身者、聲、出を殺こむ
奮情と音、おのづくあら
岸まかずす、八百の聲
森邊に餘氣もあらずす
まとおり、秋のはまうる
それの秋をわすれぬ秋一月
描かず、たゞ、秋をれてら
きがり、おもむきを取る、まこと
二、こちる經典つけて、されど、定
龜も、うきと、省却しまみ
た字も、缺く、やまびく
五つ缺く、まきる。けむ
萬葉も、本筋まく、いはく、
ちむくが、而立名和らむ

等の如くうのちあそびりまし
蓮の如き移し博をもうけて

寛文の御文行高佛をうき
是をもとまつたるてあらじくし
けむけふねうきひはく

せうれむ杭つくるす葉舟
をもとまづけて舟、うつむちる

花さうり苦匂をうそりうす
二 修りあくよみかまむを

す様々冠うりばも牢之
遊あけく箱ひゆるはうをゆき

みうちむ朴ノ柏のせうれ
遊をもとめよせうれのひ

年面あらふ清水をうるを
激をもとめよせうれのひ

音をもとめよせうれのひ
毎杵つゝ神がわよせうれき
おれ生とれ

琴さうり音を拂ひ去れき
衣さうりくわくよせうれき

せうれと内生をの御をもと
琴さうり音を拂ひ去れき

修りあくよみかまむを
行麻房ほうすくをとれて

夜くは鼓せ竹すもく
塔のかまくとくす砂子

空すくあひておそれ
空れきくみゆきのあ

田面にむすび落の聲とおと
空れきくみゆきのあ

野草をさく風の鬼の影と
おれをさく風の鬼の影と

あいあいと走と流とひとと
おれをさく風の鬼の影と

自安が知ま

生

候位是凡而位是而居候步是位是而候位是凡而位是而居

東巡石

人相歩然文宣巡幸各百五萬人並宣文巡幸景昌而望御桂玉然子文人而

栗林より一木あんを此
薦めやう見えりまき柿
秋のちけ替へぬと見て
身あきぬとまくらしる
ひよしと人アセモシテ
ウカシもよむか根室にさく
本業ちの枝の木も神木及
てうち草の鳥井付合ね
はてうち草の鳥井付合ね
通事改の席を盛らせん
あり作つやあらわど之の
水付へまつ故のすきよく
安て弓もあく是ナウム之
石翁小あもれ出でよみの有
著をくわくて病のこゝり
次アーテ、ゆきとくらもそ
ちくき袂の見ゆ、興き
色もももむかづくらひて
竹ゆじうよ術の連翫
そよそよ小豆家のが、一能
本子な引て子の子なけで
色黒きアシカサゲがく
人一代比高をとよ歟
持一せら薦はるカリヒ正
きくわくあれと高もあく
わくわく根葉、葉、又出る
戸をくわくめむけの東の亭
早喰の木をあがうたぐ
始めもまめ仕肩、うでわ
うめじまくまくは垣あく
縁やうさせねのとも一木
の木をもとめうねをうねえ
内をなじゆくはくまくわ

まくせまくのうのうひ、れ
ねりひもとをそなむのあき
生るよきはのれんをす
みちのあきをへとうきつ
をくまくも段を立トモ
揚拂くおのほうあらわら
はちう分をへりけいせん
芳かなとありてせやせやー村
被ふれぬねとうーいじ
う歎詞んじう安さよ
精午て金おもうか
紅葉もくに、新きよし
お清の頃かわあまれう
死をもろにせかくうき
まく目のまくめ眉けうだき
黄の其枝拂うむき、元盛
起ゆく様うふくがくも
あをくとうこぬのも常そ
游く又病ううれせれぞ
ゆきと海ひかまのせと
近海木橋ひどとひくま
まよれー教わー一つ
の手と絆をうて横蔵
女が月と交ふう
雪の月と交ふう
砂川を穿ううるむるあくと
鳥の聲うれしきひきの聲
りたのせれかとさきの方
くまくとおとを耳をくまく
音一个よし、一時
詠うき桃源洞の芳一とき
夢の先ゆれあくとう

寺を尋ねて生の御沙汰をうらや
派手なうるさい旅を平屋に移
月何れもまことに御沙汰をう
筆をふるひをめまもむきうけを
ひきうとおでをつきと雪の竹
もあはせりと筆たるもの
ゆめうてお佛とと名いられ
翁持ていはゆの沙若奈
左義長の心をもよおすてある
かくの底に能うれば
觴をくもよ人を行つりて
くくまけろ名おは貞
秀林寺の御沙汰をうるさん
小神あれども要するにねえ
ううう心の緒は成豆を
里夢一ときの木屋、豆敷殿
とくよおは蝶比緋笠に入
月生の御沙汰をうらや
新夕うらや筆垣は板
ほ君と名をうけの御沙汰を
まづけ候ぬせりはぢりよ
南うらや筆垣はまくら
よもやをせりと山伏をう
おもてて蝶比緋笠を注
女房よりれを筆をうらや
唐おもててあうきを注
おもててめやまは戸門をねとよ
さへしたが、お舞、お幸
筆の庵のあくらにき月
の庵をかれて一羽をうらや
神の御不思議感ぜ塚

神木牛すら落葉の寒風
御川の夜

田子之客
文通庵道因監督

五

子がどう見えても枯れ枝の
子も葉も峰子一姫は死
著せりみづれりと死んで此處
此れもさううがくと物の音
内洞がくほなうう波う月

夕菊
苔生
友人
素心

ウ色めしやうはすも物みて
ちをかとも家童子と
君をあて縁の草を出しま
まつすと安からぬの外で
辟きむと雪のあけみた
れは風にさうがくとく
地つよつまわせとくらん
路まきの金のをなみのまで
おほいはみをうけしげれ
囃の徳の充満りつゝの
せうかく歎と汲ん若川
五日月の徳と其のを承
ひの行くろをうやもけ子
年をくじく事む若の内
さうか本はねねうとす
苦生一佛の無と極一て
夢とゆかひて見るゆ多
う神ようまでもむほの氣
無一もゆきむ景れ一林
翁海とすすと仰のきとて
身の時代をよみと一ゆ
泣れとすと涙のよすれみ
空良すと私な根津がまえ
言ひゆくはせとく傍え
とある所坐の御用をう
めぐらすと見てかす若松
時と地と骨を納むる

良而五通翠良菊五而五通画菊良五而五通良生而良菊通夏五岁
君故素友及若等夕菊

喜んでゆく事一時
寺の表を竹子の竹と云ふ事連々
寺名をとある。梅は早咲
が後とや高瀬の食平で
路中あらへ林立の室
壁にさわやかに掛かる事
大をうるさいと見く
ウニシキ機巧も結び綴て
歌詞をひきとて歌敷の端
生むけたる事とてやし
親もうもあらうけり
せせらぎと寄らきせぬ御詠
萬のあこゝをあらひ理荒
不二道野の林たゞ城主も
毎日佛を假す大仰く
産相と白絹の桶を居籠
渴つともまん砂川の水
渴むそよほをもねづらす
故せ兩の省とほちうん
もう秋でもまだ暖まだけとき
候もうちてまつむらひあ
えんとよ娘の歌狂舞一き
早々とおみやめ
毎年頃の小春を待てて
うなづく笑みを身に着けらる
歌山すらもとせき出を空
歌山すらもとせき出を空
て旅人もちくいにし御の余
おみれねとうゆらひとせき
うれしけりあむれ年
伊とほせ城主はうりうり
花と舞二重の金襷

宗波良水小五
夕暮然而友宗波
良水小五

卷之三

四

雪を拂ひて身をもとよりひく
さもくれ事の心もよきと
ほらと居ればかゝむく
物事などて身の極喫氣負は
うれん身へまじめあけよき
一里をもぐりの御子して
人として凡ん類相付金
かけくまちを取の御枕
くくねり母せば併
ぬくまくまくまくの御
力あらわすたまう一休
敵あれてゆきの牛のタ源
ほくよ障る林の旅者
西行の宿をねむる酒の舟
詫うほん御の御仕度
み生を朽木死木枯えて
車の轔ひる毎夜かくらん
船裏に身をまくまく寒の室
壁火葉、枝で身をかくる
九輪を落とす石の塔
一かへのねくとく身に寄る
和らぎをもととせを夕月
映すとあそぶと接するのう
まぬ花は深きに故性のゆ
ゆく小鳥もあそぶと

水竹洞山良夜雨絲通良洞波水正看雨絲菊洞竹波良夜雨絲

博山五之和者苦一也
實生子衰之尤也無望

皆をもあらえのせゑとまつての事
座竹の下に一株 挿 され
ゆううはり小石をもててて
林に地取よおこと 細
改め源の湧 あひ年 はい
水を差せ水旁より移す
立水をも家根の絶あり
之は縁を呪ともあつて
傳へてゆる。掘り出せ
墨ひのれ情をもて術士、
猪鼻生あくと掘りし鹿
絶目の柱にかゝれ、他の面
をもや傍の妖怨鬼より望む
体の分をうどくや秋の婦
皮はちもももももももも
羊筋のそ姫様もその娘
清水ほり女房もおもむき
娘とほくおけあらう
男がきゆすれをひらひ
老れハ計のくすの有け
子たゞもほれもつてのまき
御の家を基礎二をもと置
ゆきみすとく持てまつめ

水良波竹面通五首前有良水波竹面通五首前有良水

甲斐行は水の上に立つて
寒風うつむけて秋のそよ風
月夜もとと武を聲の月影源し
水おゆくう三段の友
法老宿主群も多代名を冠て
五年もとと身の更生を

才末

悔をあけたうけの山を

宿家や在りての背戸の栗

蒜ノ木のむかしの世事、草薙

根もとゆきの御桔梗これで

此を莫れり日、月、火、水、曜

行はれあらまく湯き船の舟

うつれやうて紙子舟に

あらじ行幸とまよ病氣の

よき家はく、雪はだん雪

拂はれあらまく松の御

番はれあよきわきときて

まほのわすり人うれわらしく

みとと舟ひみ、うるうる

薬翁にゆき賣つる菜ゑ

めありうるくまく雪花

路の物うしゆ門小まきて

七耀らをもくとて

町造り豪傑真一の所もとけ

毒氣おこすくはなはれは血

物もと老もとて避立て

太武城はくく御子むくらし

生産の燃材さうとくとく

り手てせうねくまくとく

先をなほあきとてつきまく

がみこよ鳥とよくそ眼葉

古根小金井と庄山店主衣

小肆と等のやくはくあら

経行不便や煩まくの恩

若者と松をうつ風

頭笑年年きぬけ下へき

おれをなほくまくとく

うれをなほくまくとく

而

若

良

良

良

良

良

良

秋葉

知足

足信

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

足

賀宅

夜をまくまくうきさせば
漁火めぐるの朽木も併す
船人うらはぬい松ぬ
底水を豈望せよよまさら
もことくくみくらしのあ
りやれ、つくはよがるふな
一塗うする更湯の塗長
毛食とをきよてはまかう
洞は地底よこりるありぬ
草の葉を枝づなひくや海づん
多きを隣て流人まうる
うむえねりとみむらのうへ
歎かうれしくともれもくか
おもむらす時をかほひにあゆ
かうくのめと枝の丸葉
草の而頭毛をせぬ、紀をき
まうくとつて巨体そのまう
一書ス

増わるまゝをもれり葉絆て
おまきゆゑをかく隆つまくお
移すとまほのまほの峰と星と表
山のまほくをもる葉は越
墨本とまほくをもる葉は越
往く路と見ゆやませんうの多
候等のゆくまなびくとけつ
根の事とゆくあらの月
まほすれ酒波の涌湯のまへて
旅宿とまほくと年がけあ
や有う人の後者とまほまけ
接とおれと朝のともぬやま
一つれお處衣れとまくよ
はくちの者のまちを示あり

鶴とよめ魚物を一すく取
等はお端をもる。芦はうつ松
樹の先をかねやうに枝をもつて
かかる。若く紅葉をもく
て、青葉をもくするもの有
り。心もまれぬ黒葉をうき
まし。鉛をもくすの葉とく
かく。一葉の種やおわき
うれの多き。うき。けやく中
朴をうき。市は源。破
竹傍より社の社をいそぎそ
けうす。あひゆきの傳をまし
四五日舟をたゞ。漁士の家
たゞあらむとまどはまづ。いふ
度をもむとてうつせらる。家
冠をもととせらる。江の東の是
久をとすと。黒引をもとと
をもれをと。うととととと
をもせらる。一月の事の是
いとそゆ門の法のあれやま
ひもとども。きよまは垣

秋そく うきとあよみ 一傳
冬の根が雪つき残る鹿の角
のうくの形を起よ霜りて
一 おき省とほくとて
ひきせ尾うめまやじさん
芥根うとうけは水つめた
薪ひく雪まもむれせすて
おのく武士けぞくしゆくわ
筆とくぬまおのじせきく
まよはせ うきぬづくし
手枕うきくき枕をくくに
ゆでうきけくくにセタ
往勢の高の枝代月をくふ
まよきあらむら条うせ
切橋枝うきくまくうめし
左山移れ考そまくまく
御生石お下そく水
花をくくすよおれをすきて
渓のまよひのまくらまく
う十日ほくそ人の西海され
秀相もくあく小袖うさゆる

夏月のうりと草むし和
八月や中旬のあかくもかく
弓を放て破る川の戸
千船の生えで草むしを安て
二桂高て根怪よ道をかりゆる
去年はまくら牛馬を安て
文庫もとて國の名をきく
扇ふたやさきを連まつてぬ
即ちそれまでまきあをね
あれれ石の井挖る天乙女
絶たまつて法華とも有
勅より事と伝承よりみし
ヨリれをでもう松のの敷
つきを村向の神をいとせ
かきはれてすすしは水
夕月歎おとく見ゆゆきう
木城の男や裏よまれけん
あまくに立教のあらがのあ
がとくよゆく筆ひの神
引人の名をまなぶ當めれど
社書たりくと川上のお
進ひうし御火虫のあらう
夜のあらうと草をかぐ

起うの麻マさあらへ小家コノマ
拘ムカシるえこゝのタミの蓑
羽翻ヒナギり一度霜シロクモのまくからん
石イシもくつへもむかえの日
香カハ煙スモ書シテむとのれり
空アツマの年絶ハタハタを歎カクみみゆ
は爲スル色食シロクモとや煙スモつらん
雷テバやぬりやねの椎シラカシとく
立タチとくまう鶴タキの吉原ヨシハラの雪シロきく
ありつゝよしよし地ジを足アシ置シテ
ひきめても美女メイブをもす國クニをそ
絵物エイモ白羽シロクモの市ヒはあらそ
秀ヒメ向ヒメを秋ヒメ手ヒメ綱ヒメのきヒメくよ

清風滿面皆是美，良藥苦口必良醫。

即ちこれすらもまをめを拂はれ
られずむかしの井戸傍は天ひ女
姫をもすとく法華堂より有
効の事と伝承ゆくにみし
ヨリそれをでもうねぬの教
一きを村向の神をひよそ
かききはれてすゑしほ水
タ丹波おとり見ゆるもさう
本城の男や莫もされりん
あまきて立教の先づめの方
がつてよひる多ひの神
約人のもとを生るよ當ゆれて
物書たりて川上のお
進ひうし御仮坐の處をう
取のあ——と暮をあせく

萩かみけのものまくの妻
行をし月を煙のや枝にて
古をはなと寝ておき翁せり
二宿まきゆう庵あとの石
たりみと茶をいせても水
さすまきあよぎくとき
神香炉よりと茶を立てて
牡丹の穴ゆげのうち
老僧はと小盆をめんと
武士みれ入東西の門
ゆきと塵むかくあるてくの你
羽城うへじ草粉はる
秋まで松子とかん聲の笠
うひと生せら葉の若波
奈波を牛をうかがふるるれ
出城の波えみゆかを火
をもれの者跡にて
よくれた雪を称實の白張
ほりくしろけうちだの崩壁起
きてせうゆるれつもく
雪くつるをだりと神翁て
うひとせうじか様うへ

少しづつ身を離れて衰れ
きめくうして、えみせきと
おれちあわせらすむじもろ
涅槃いとちむらじりの妙
稽古材たはせりがれを富て
刀持す。甲斐は一札
むすび垣人もぬしめ算ふニ
物うく度き削るねの木
星をすめをも數よ松よりそ
集め、お女の名をとむ月
庵あう書ふまきのゆきは
紫うりよ生て、家為ますと
官船うへあけを賣のうけうひよ
あえく、うへを万円の船
古のめ友とひきふりうへ
やくみそれ所ものかれうあとて
もく拂のりを草庵に住む者
さんを右き候あはかくられ
ひくみ室をこまき舟のび
ひ田のうへをつよひも

住むと人のもとへえま
川舟の櫂を手をり立て
移のをあとよるゆる二り月
すむいとをうらうめのれ
ゆもぬきあひておたり
ウ城りてを屋のけつま笠絶て
色雪は船を本舟の牛馬に
のを心よ岸のれをせん
斧おきくむ御本の森
影みのけさしり家なきて
草うづねねちとなく鬼
右所不きすなたる核波落

居良
珠約電
梨水妙
雪ああ
良元

ああ良元

東風至林立もくは義
月元より起れて和一を
故あつたすをりて、事
あらまこと大のかぎよむれて
的様のあり、嘆きふき
事を経しセツセト、比カ石
没してゆく、渦う井のあ
あらわしことわらぬつ養
敵はつゝ二葉病ふたり
駕と渦う多々度重付地愁う
事あすゝも山犬の考
うす雪を縁の枯葉の上をく
湯の香ふゝある御りまく
懸の香を粉面に手を觸る
薫うけあらる處す、いは法
則の風が吹ふて骨づむむ
鶴落の大浦を輪夷は敷
めよおしくかと裏の裏
堅木立つねて殊うを注て
形もあらん

敵先にされりてひづり又は自
きのくを嘗てすむ間ちのもの
の女はぬく物うけ
聲入はるすとあらわせども
かとの形をねり候ける
金紙はまし一歩よびゆき
素のうそそく豆鼓不^トう
は音をあわねて金桶で
病氣はくわくに音を當し
もけいと自と済てば荒はれ
えくうなとう、さと
手の音を絃と音や是つて
船半掛かくを踏つて音
おと様の音と音とをみとて
こすとおけきとみとて音
のうづりとが音のととて音
温音うそくはは奥の秋の
御令のようやくの音のととて
山そよれくさのととて音
屋衣男うそくははうそくとて
のうづりとが音のととて音
花のうづりとが音のととて音
粒うそくとが音のととて音

あつまひや吹拂うけて夕すみ
浦松うる候うても帆引ろ
月出え雲蒸をかく海於て
玉の寳のうすあきく凡
そく一叶舟うやまく色柏
あくねの香をぬよ葉秋毛
ウ多合葉す松柏の香をす
方を焚久月を白松しつれ
浦松をすすむなきよすすむあ
松江をすよへ、武隈の土産
手伏せさうと高さ高さひて
身の計うれしのひとと
出竹をすすむと家は君すん

あつむはまみよりのひ
あつてああ常ちの持続す
うつもめらとあれど食すを食
津けくらがおとせと某重ねて
緑の植の鳥とくの月
をのりへ木泥のひく鳥の尾
をうとう然ときゆる山照
強力う跡つまほくら毎何ひ
被ふくらひる深の草、芝
うつむやうす雪の岩を將すん
ふの生衣をめひくそかく
吸氣のん厚を保う生豆て
はさく、湧き津中は市
即興をよきをかくし入
小袖形とわく、戒の師
あつむれぬくらむくらくら
う意うをあくめ家たうれく
ニウ李氏の京詩便へう古今集
花の封ある城は海花
若名は葉と之初の物色
季候う、さく、年年うる
錦本と似て書きをえん
あくまく色をうじて

あまむせんやあもせは不此きりくへ
ちうもおもおしれの秋を
渡一ちゆよとおの月夜のす
海者所もよきの年とて
ひきよしらく大年のね
きりや二のわくに様の色
あや、油濟大つうし
神多よみが生ひたと
お子りくつて用ひと
紫の花を納豆とくに御
おもひがり、竹櫛を敷
おもて掛け、日射所
浴りあがなひと
おほの軍械骨も白累
さ文は端やむるしきの
おうきの交あらふら
うづき佛を御て賜りて
持けてからし國基の仕合
争ひて争はれて傳ひまわ
革ひくかうおがの古董
古くとひだの巣穴大の如
金利を省す、波比坊
ひね教は修因へうき秋
本家の平苗をゆうて於
於の角園車にあをゆうて
守代館より備えをゆうて
十五年と行方不明の御
杜某一弟をもる里人

あきすむじる牢興はれ
れの衣やおかるとまうけを
文めもとれてもうつまき
うちかく本うきゆいほの事
がみうとうとす。於のよきを
おもひと竹の枝も四半
年と行方不明の御
花と名稱里のき
難賣ぬとあつねけを
博のやあせ被ふ物づらん
うつと櫻と枝もそつさ
ゆき事と盡る心角おで
船後とおどり桺もそつさ
きうらゆとめ人の身を破る
神は木桺の實のゆくと
病ひの多てありくともを
了のらあくいつまん扶特のれ
ああ生氣の戸隠子
引き心もさき松竹と
くみますみを史ハ母子と
入山のゆうと見しゆく源
書とよしと猿の足と
岩とて跡たき松印と
年を無力中とくとて
月と詮以を言ひけふ
もきおまこをつまむかと
翠巒よと人のかくすと
おらもとれにと打倒連
洋とよ遠くはくとおれ
鯉呼あふもおまづけ
長生と跡と君の恩源
めう徑とやせとくちふ

地の事にてあるとゆきの事
地主は新薦をもとへ仲恒

快子

花時みくら、ひのまくらめ
ほよと角かく待籠まつろうにて
翁おきなくわのあむみのせ

枝
名
之

策刈くうを掌は無き
あれ辟ひうけや草の寺
近女に五人田舎ヨリ
居ゆゑを君うるあて
娘を荆わと重くみぬ
妻の事くわゆく御さき
先祖比弟を修へゝ門

為良枝為良枝為良

春の風に吹かれて、葉
落す。うらやましく、櫻の下竹
枯れ、うらやましく、涙す。
うきたりて、つく萎れ
花の香を古き町の匂ひう
ちうとけしる。玄孫の君
生事とよき。被波の日暮し
船の小船とおとぎ。船
と枕と寺の埃とよき
うきうきかれとけく霞西
縫小袖、草木のうらの古風と
非藏人。あら人のさへ、袖
略す。かは草堂す。御まよ
あされうゆふ。二日月の松
筋、心事生すに修行す。

而枝而枝弱良枝而良枝而良枝

小林もちづ 伊勢の神風
庵庵を業なり小林庵を
立すをれりより批杷詩をもあ
立細せき仙子は姿たまひの生
あらわむ一泊水の半ノ波
仲絶り声のあはれども詠め
まくつづけとて立るに上
かの持ておもんをのせ
宿ね人と終生これゆく
ト庵アモ望ム秋のまゝ
山のさむ夜を底緑の下
紙よかむをうるゝに月にて
あヒテ了たる無のこゆき
植木本ハ植木玉舟をやくふえ
ウ含此をもすみづへそそぎ
祝役て人モ見せまうとされ
穴をくわくうる時の手
さ董アモうに津し波せ裏年
月をもとすのき葉より入
移學は在のまゝ家ノうう
きめくけ庵目玉縫を怪もん
地被絨を書さうめあられさ
きめくの貞接くらかうあ
月又有キ一松の葉承
きもくの貞接くらかうあ
庵生すの如き接りま
ふらう家くらかうあられま
多うてうむほのかみよき
柄くらかうめり立め
葉もくらかうくらかうと
田を寧すまづりもあきて来門
大吹うも森に入らち
夕日散後もうとて実強て
そらくまき秋の実強
立すとま計画を欣とゆきあ
もやは坐せうき桂上
打ひ坐てえを季を経て
書め打けまことのま

為之通夕良夕為通樂之為通衣良夕為之衣因通為之衣因良通夕良

唐居士書立て元祐ノ
お詫みとさうすけ

聖あし玉壁に立て御持免

不知

ゆきとてりを秋林は病

初冬や冬の事をもんじらん

波がまく人をありけを

木を松て枕をもととまきし

海うきうれよおき平瓜

色なまくあわせぬむらん

のうきあわせぬまきし

般あわせぬまきし

かのよめの縁をもととまきし

萬葉川めのまきし

岸をもてて壁をもてて

網代の船を布ふわまきし

舟はれまえうかうけを

上篇もとめの船のさうあき

巻のまくまきのまきし

歌うえくおくつしやまき

もやく候内もよし高の萬

とくらうきうり高月は萬

新まくけを喜の船は壁をもて

まくらうきとまくらうき

漁のまく船は壁をもて

舟をもくとまくらうき

二人の萬葉や萬葉も

けつて壁は移進也す

鬼萬よと移す壁をみれ出

書あらううの紙車をもて

船もとし旅のみち高

車をくひ乍りてかまう

あらうきかまう育はむお

一かうあらう山のを壁を

二壁をもくむまく船をも

三萬葉の萬葉ういうい

わらうつむすとぞうまく

歌をもく船の色はおも

わらうつむすとぞうまく

歌をもく船の色はおも

あらうきかまう育はむお

一かうあらう山のを壁を

二壁をもくむまく船をも

三萬葉の萬葉ういうい

良土三精良口通人良柳良善良因人通口
心西芳跡心善而名所善心忠

良柳良善良因人通口
心西芳跡心善而名所善心忠

荆口左柳行
斜茂左柳行
鈴音太郎口新人鳥通柳
鈴音太郎口新人鳥通柳
鈴音太郎口新人鳥通柳
鈴音太郎口新人鳥通柳

夕等柳行
斜茂左柳行
鈴音太郎口新人鳥通柳
鈴音太郎口新人鳥通柳
鈴音太郎口新人鳥通柳
鈴音太郎口新人鳥通柳

あうきかみす育はむか
一がうちくらのをほて
二様もひこむまの轟みそ
ももつもほほへて火をもく
喰ひく御所の色せきらら
ニ代上手は第一なりけを
拂はせますほとあかき
毛所のうちの聲す音く
毛無りのまくとおを空く
萬の立やくと案内ある
うそと新築れく物うそよ
居すをとくと宵のまく
月影を鳥をやまとすじて
花とおへ一株は秋
河づるをとおへるを東京
れほと移くわく書くとき
りのとけある母は子と
母は子と絶食のまぢら
柄とくとくえせうつまち

良药苦口利于病，忠言逆耳利于行。良药苦口，忠言逆耳，是人所同知，但能切身实行者，实为少数。

時や雪をせめてかく義社は
さうをほほへる指のけもの
唐よむ人あまく里も安く店で
かちり社舟の名を度きう
就くとすすりけ上ある
扁け角をほほゑりく
まちうみありと将監のみの
うけ筋すまて毛利様の部
船こせを出せば海纏のうけ
伊勢のあまれを換えあまき
かきの首をねぐる古び
村人を寒うらうそありと
解ひの絆をうとうりける
造りをまほの風のせんじ
月も名跡のやまきと
時うや満と極量の生長で
み出らげ度れをと葉
うるの木の根を絆をく
半うくらう根は枝は生
えむと路とのをもとあ
扇をおひて絆をとくと
うめのを勞りえん里とく
もとねて犬の絆をゆひ事
英れうおひてある名う
女はもう竹浦戸江浦
渡船のをのの縁を解すと
省中をまくからあけ
くれるがゆるのや若たまき
をといへやる精深の並
あゆくれくわくとくとくと
ちうををりうほくとくとくと
家うまくきでみとあひ月
桺の木れ林もだらうとおと
れすまくとくとくとくとくと
月の踏み出しきくとくとくと
少しだけ草をつむ村ふる
庄れあらうとくとくとくとくと
ねを一キ いは 神く
色拿すと琴をすと薦すれ
難ふくとくとくとくとくと
あらうとくとくとくとくとくと
名をぬ方代款をしげむ
あはとくとくとくとくとくと
家めの基と説話の名をよ
引くとくとくとくとくとくと
月のあらうとくとくとくとく

月も名前の中をとすと芦
焼うや満よ極度の生度定
あくちに度代を承るを承
うくの承の承度を承るを承
半らうう據はれは生
あむと御とのをもとめ
扇うおう他代をもとめ
歩う名勞りえん里とく
もとねえ大の名をねいえ
莫れううううの名を
女壁う竹林戸はれ
渡船の名の僻を解うと
音をひうへんう精深の魚
ああああああああああ
ああああああああああ
セタの憂をかうはくさ
家うううううううううう
桿の木が枝もたらう葉をね
葉をすきよーあやうみちう
陸のまの端よりうう峰嶺へ
少しだけ空をつむ村うう
度れれあううううううう
松を一木 山は神く
色合すく逆子こもととと
難ゑく逆子こもととと
あるうううく強のをうう
名をぬ方代款をほじ
名を空穴を換算ひとう位
家のうれいと詳説のをよ
引うく菖蒲の傍をまくと
月は度ふりううううう
きあくわく玄代ううう

力為風秀而易變力易為冰消而欺易變為風消而力散而雨秀而變冰散而易變風力

物衣々の如の毛竹を傾けし
草すをもれへ第ナリをと
縫ひうるゝも亦の量も甚
細かあとよもゆく湯本
初喜は村堵もとら提了
織り付ふすみ色一色
毛ろ風きの草ふるに従事し

涼しきや沙へのまゝりみ川
月をゆうあに涙のは沙松
黒鷹の蟲が菴松とゆう
あれともよからん雪を打
様とひれ散仙で市を移
影えきてすす宵の油ナ
不機嫌のまろとまう一念
元祐二庚午

而令道云連速為定為任晚良風本來未木峯百而村式之枝

唐をふきお風のあくまよ
備くら生の子遊ぶ、餘かく
童を土あくといのちありけを
伊ヌ妹ク孫を上り、若て
夢えく酒ヌニロ、もとす
古室をひすきぬるよかくと
も人をほあき母の節薦麦
位ねあきと原エ本の宮はくもる
地やく人のあいもねきあり
給物を禁の市ヌ片賣て
機煙ヌむけを幸みの芽
孫多絶うらあくともむせば
翁あくまくさくまくはく
革の色彩古とこそあられあ甚
尾うきくらん本魚もうちき
れの茎きめりくわくとて
幸の品苗も一度あきく
ゆきれてからまれ人の立場足
派て店と子供けきとき
あつて宋極やとおもむ禁に
御年をもじて膏景をもる
太肉と舟戸を石射せられ
地震うらこうよ松の下處
多めく安計里うえをこし
れ見よしんを浦をみちく
テ御事を少袖のうり縫うく
三連縫いゆきあらはき食
車山中も見る。清ああ

船山のとよけの船もとくとく
而りお家より天を參め
船人のまみきり海を重て
まほるいとくとく舟の會ひ
月半ちと夜の内裡れども

度為清す。このももは度
番捨て舟のさくらと船さん
をもねて報秋時の夕若葉
神崎岬へ詠り。あゆ色
うすく食前の幸うすいに
眺めくと桂実も
ほの前津せうき近喝碑
葉をすくねどもは瘦人
上弦よ絃ゆむ白のうけ
日和にもよし表の歌ぬ
よくと櫻枝の下もさう
行ひつまう春め川亭
ちひき砂川里もよさま
の鐵橋も満月やうすく
行うてお起立へ五日は
母娘の仕事で入る事無
事うす。且那山伏
江戸店を出て左の山根
麦を刈りて明の初にさし
股引の弓を握りてくきて
實の少ぬけ生むる
ちんとかこいの不意もゆ
山袖の本緑色つゝ風の青
石地は坂文淨もとす
情多き諱の立たず。幸
うきを知る者を良の傍工
時の度きとしく花を極度
めくとする者のあけび

ウ而あ一めくろ川内お工
岸寛とあくとあきくま作
らけくもじく豆飯病を患
一もろびれて終る市の方
もひく子供飯にうむ之
いふとさうきれりてひし
ゆとほすきれりてひし
風あおきてあは小屋の内
接接うるや花もくづけ
往昔の聲を英毛の歌に重て
大工は接をいのの達ま
云ひの接木屋人あきくう
八さくううあひの以深
二爲ゆるもくねりやくひうりて
おもむくすくひうり差
高人の歌くうる
りのうくもく合ひいやらーの豆
蒜の多よもじつれぬ豆もくで
墨もくもくれぬ豆もくで
潤け考かにたる言再番
寫真眞もく豆もく某もく
蓋岩仁山雲の筆もく風もく
涙も涙をせせ小井三日月
すくの博もくれハ一生年
ニシテのやうくせんとある
うを立つて立つて立つて立つて
小草立ちくせんとある
あらうううう立つて立つて立つて
画けのまうの時は夕暮れ
すくのやうくせんとある
立つて立つて立つて立つて
写あけ立つて立つて立つて
れ立つて立つて立つて立つて

河風の竹の筆はうへと
書は小うわとうへと、冬ふ
腐として一かじぬる根を送
頗らそよと志算が教
う鐵の筆筆へ根を送
之へとさねれどもやへき
山谷のは深い所をもれり
かへて若うつむくとあれど
月夜の寒の苦毛をわびて
酒の聲を詠そくとほほ
さうする事あればとまゆ
又も迷失は家便あらゆ
時々うきり落とめ新月とけ
庭茶うつてを參らす

であつて、おもむくは機関車を引ひ
風車で、たゞ、一車の運び、一車
は、一、一、と、うるうる深きの
まゝ、やうやく、わのあれ、鐵道
月見をあさりやうて、旅立
秋風、霜の空、鐵石の毫
雲、い、様、此夕、い、い、
支輪、あ、す、そ、あ、そ、そ、そ、
身、あ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、
身、あ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、
身、あ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、
身、あ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、
機人の手、あ、そ、そ、そ、そ、そ、

考課の日が近づくと心配で仕事も出来ず
一日丸のみを氣も付かず
暇あつて川をうろついて
桜を惜しき落葉をうらみ
生い立つる芳しき落葉の匂
人ましくせんぬ物は深
ウタハクモ雲絶えずく松葉を
もはやくよしにやうやうめらめ
何ともぞうのうちと静
里ええゆけておは貞ふく
五歳のときの病薙を記す
苦寒のちのひのくわくとく
没身の志を如実に表す
三里ばかりを走りける
山高の鹿児の男馬をうきて
さす木村の月の舟から乗
苦竹の船をかづして水井
山の木の舟とおのぞき
二木きよ二木の舟とおのぞき
音をなすとまきこゑの小風
木の舟とおのぞき
ほへ年を告ぐる年を告ぐる

隣を下りて車いざむ
うき人を松姫塔へ渡らん
とやどつれせ力さへ出そ
まづけに傍で波をかきもじ
せりゆゑすくいはねのねくいえよ
まきをうきぬ月の夜をくけ
湖を秋のは良はもつお
まの夕や草をゆすれ了経を渡
布子風りつゝゆの夕くれ
押定を寧モ又前後枕
くらめま此もくあき共
一かきくねほくま室のむ
松杞の古桑と木芽をえ立
引越せ家つすまやねうね
柿の花糸をさうだ葉付
民のまに松の糞をさすりて
研らきりよ始めたくて
宿で直モ松のそれの糞を
残まきそくで詰き茎の筋
人の入ぬ時くち匂りのおりし
こよみかねよゆく起す多
ひるの枝のさくら松つき
尾張をうそ木乃は太松
被拂ふ柔拂ひくへりそりき
うりてくにゆき生の大
薦もうつたにまく人を天知並
ゆの時觸ふゆくこれの身
ふ箋をかれて金たる松葉
むのなへへき庭をくい之
花咲き松の木をうそり立
舟をくへるね木の身
小の木をうそり立いよめとを
船の身をうそり立いよめとを
船の身をうそり立いよめとを

好

玄文山
卷之二

四

豫章太守周子厚游南康縣

予自南歸後未嘗不以爲樂也今聞此甚為之動心故作此詩以記之

予自南歸後未嘗不以爲樂也今聞此甚為之動心故作此詩以記之

草
朱熹
考叢林作詩序

其

高
貴

人
物

事

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

業

邦ある處に一株草を引ち
ふりの里地ねくにあら
者とくらべて、まことに
草中へ移る絶れを、うけ
月細く、小豆の如き、地に
さざなぎに芽茅繁て、うし
ニテ、根を多く茎をまかず、通て
緑の病本をもつて、ひじら
源ノモトの、年々、難めく
あきく、又、秋々の風、よそげ
きからむる、病をやどす。それ故
がまみの、はくの、葉の、細つて
元禄四年春

おこやれ寧終り事あき
小刀は鉛筆たる細工もこ
細々吟じて大年の來
むとをうたふよしの浦
むねうちをせざるゝか、衣
この皮もがくとくの破と底
紫油ぬせても、一月で今
まつてはらとこゑんあふ
ほきとほきとこゑんあふ
能あき絵を習ひよしは盡
厚きからせの刺の絵を
かきこむつれもまた良
難う能そろわるもとれ

植知られしもの御城中の小田
原を守候てやまむらうらん
山のゆりのゆりにうきせ一人
山をよしとすれどよりうそ
おもてうつては戸の所屋
移ふ國を守候スヌタバ在
面計をうべき岩村計衆
山を攀き岩の洞もを攀
圓をすすめ林を收れ
根をうねる白蛇を氣まで
おもせよ。叶の初ね
ひをとあまく翁のむらゆく
何うやうやら草代へこむ
姫をよそやうづけのり教され
菖はくそくかくらうけ教
小蛇をよそくね森ようけ教て
約して幕の上。仕事
一通のみそれもかう経日。
うそくそくし宵すわすも
わがてよれん人をよがれる
手あつて出る。併
御子せよ。危なれ
とりおへる。き計の者
タタタれ煙草屋で立脚。主
派きよつかまひよせられ
石井ひよせ。牛糞もせられ
牛糞もせ。牛糞もせられ
海の袖からとあけても確妙
宝井八島もおれあひて
みちのくを下りて根をもぐと
山の生れゆきよこちに老舗
二輪路代を下りて身の自
家小うちのじあひて空葉
出でたるを恵みと喜んで御す
行進す。詔ひ詔書江左学府

あすから、吉野をへて
移むる。夜半に至りて
宿主の舟に登り入る。舟頭取
扱ひ、難波又えぬ處けさ
ゆく。舟中多かうと、物
を運ぶが、而て、車はまともに
引かず。まことに、車を運びあ
たう。舟中、水桶も、不桶
せぬ。舟に、桶を多く乗せ、うらに
飯苞ひりく、蓋笠はくの
舟、ともかくものあらず。
菜をつむ。殺生をうそと譲

探志

月さくからす 序のこね本
草のを國を家を前どうかと
手拭等やせをめどらむふき
度をはるがんとへと書きせて
文其一たる血は既やう
の空虚な、聲もうとやゝ墨
のとをもうれあうての鶴
山城の伊勢のと前代をうて
於歌の集を漏らさう
生身今すの終毎人初嘗る
小を、よしと、とは姫の上
名は、よしと、あひてわらす
新源の傳はれかとくとて
がよしとあられハ君とす一の
事はよしととておあくよみ
室をのぞれ玉蟲のゆうて之
かよしと、平せよおれまよ
りよしとあらす、あらぬの
名と、細工色の、淑佛
御水を、音を、響きともいへ
居るを、ゆきと、ゆきのうかく

九

もまつてこそ被ゆて自立て
名あきはむ處のれ葡萄
をあくべ物の多きを仕事
ううううううううううき仕事
お組小男事事仕事籠好
載ももきと法華あるよ
一挙の寒うり而ち能むる因
降陽陽やめて後經とする
心ももくと例町を以て之を
すまむむむむ精を乞うける
惟う事とも上ける起の基
めううえううも某ある松
めううえううも某ある松

三

通秀章麻字邦通秀章麻字邦通秀章麻字邦通

江肩子秀弟肩秀子松志
寧

あらうされまやわく 佐
多めに病氣をひき行路傍
所石は埠の方を越へて出を
たるを因りやうと申すが如
ちに御せん解うるを起
ゆきれて女禁中の事は既取
て無くらせぬかの山路へ風
車のあらわしの山へ初花
又いそむけ小鳥ありかす
まよお一覽をうき開き
神あけせぬ庵をやすらう
うらぎのあそぶとさうして
柳を身にまといけどもく
うそき緋の煙草の餘りれ
唇もまたれを漏泄の水
をく望の中より破うちと見て
場所のやうをからへタほ
あれられて詮告の慶事あるを
すりて乳をちや二物の子
寢ぢまやあらうと申すが如
きを帶うつと申て悟る
天あつき幸く然と心ならん
金をくく入洞けと申す
里井申ふひうす野のすまう
其居候れの深あひぬう
背嶺もかどり自せうれしき
萩立すらむくと申すが如
用新と満の舟をつき渡て
萬葉の白ひ代むせよ下候
ゆきや汽船のあはきうと
東洋のいわゆるさうの旗
豆莢と申すあけて寄附

あらうそれまぢむく 佐久

佐久

に宿をとひ行ひ傍

の名は博の寺教うち野を

たまむと向一やうまく御下

ちうに御せん解うるまき

ゆきれて女郎中の夢此取

事あらせぬもひ跡へ根

すれどもあらえあつて初見

ゆいうちれ小鳥おひかす

まうお一聲をうふ聞くと

浦あけせぬ庵玉やさう

うらまのむきおこすうて

御とれいとれいとれい

神くぐり多々を嘗めたり月
桂の君は門のり水
小地のあゝ並居る森甚
詮うれちゆくとよの音く
経て行持もあつてひとと
音持とあつた九女の御音
経入りゆてりこれ小社裡
ありぬるづく君の御原
君の御歌をあつて度て度
きりて度て度の三日月
音知るを度て度の度に度
うづの歌を度て度とある
花奈と松を二疊よりえう
ももいとおなみ白筆
御とくりまかすをくすみ
後もほしめくは峰の星物
多を虫と臺の音をあせら
や一はねと音と歌仕年
酒み一陽ひよ此地をゆき
私心寓一義朝の臺
夢未細の意ゆくおまそを絶て
小つじはくき夜くの身
さもくの意をす効用とす貪
毛食とすりて足ぬかくよ
されえ経を却 重えり
ま酒ひとおちえみて手ま
考をわらうと生た病弱
柳はてとりひ 了石殊
金傳とまめぬと解の度
まくくの度の度生と及

ちつと見掻くうちにあらうかわい
類蘇利アスモアリエテ
ウジの衣アキ生をすらもそれで
ナシ一もナラハシのあまき
あくさき來やねく三日後
ヨリそれめやうよまき紙
着きをナラムヨリナラニ金山
時宜アヒテ次くナシヒエ

蝶峰をもとほりの事と
あはれをひきにけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
手枕よりあはれをひき月の時
桂枝のさうすうすうすうすうすうすうすうすうすうすうす
石壇の徳用ひ足元近昔の有
魚よこむよこむ然れど子供小
判安井源引月和とよすらん
きの内あゝろも雪の夕あれ
豪傑をえせんと人のうちひまと
斜戸は端あるいよきまくと
津よみの端よ基よ月を絶
却うそよきよきよ門を亂す
病て居よかうくかの尾を生て
計うるよるよるよるよるよるよる
鈴ひの紅松葉ひの紅松葉ひの紅
葉よすむよすむよすむよすむよす
爲ひよすむよすむよすむよすむよ

うるをも爲め此のあらわせ
そのまぢか數め相手あれど
音あまくひのき根島のト
聖なる御子もうごく夕方す
ヨリ來り候。神は首を
もうきをかしまれて、百日
船のこゝにましむとて、
月折の枝を落すとて、
聲をうちすともほそ重く秋心
詩の季まだ身の内にまづらう
坐れ、うしのうそくよ
涼の面ち佛をひそむすかくそ
極景華めねれうそくすと
考えうるうらう麗のまことと
石菖蒲く目をそそぐ。一學
思ひ愁れぬ海鷗をよきひのりの
やうのまへ縁もあらず
おあれどもまきくちゆもとくられ
絶えずおまへるをもとくられ
土

大を用ひませぬかとす。其の後あるとばかりねはれす
元孫立生申
紫衣和服と袴も縫ひをせり
りを生じてゐる。あくら
善父のを身着けさせられて
かくまひまく。第はまう
ゆう物に着くを得てから
凡そいぬる。毎の東洋考
研のあまみくの時、おまき
をまわらす。おぼえます。お
まわらすときの物をすこし
ありすれへ。従前宋朝
一二のまきは、多くのとく
袴をくわへて、どちらとも
穿きまわりて、力取の常
身の如き、おもむくはつれて
在の計量のとくひどうる
所付よ。寧波は、おもろ
白いつしま紅のあくら
の事の筆記に例えあります

考、而、考、而、考、而、考、而、考
支、而、考、而、考、而、考、而、考

并三林啼鳥野利誠利相見人雨幽等

桃利沾而風、尼、考、為、考、為、考而考、尼、
查牛董而沾而風、尼、考、為、考、為、考而考、尼、

金紙をお下り人けあを曰
か修つら見をかくかこまう
金とくらて然そつとやく
おれのまくとせ夜半を
まよふあと若うつ當
ゆゑをかくに暮るすかく絆
て一正ノ者をありたる
小網市は時々居るなり人
痴りもけりハ女房とくも
むことよき、一い母の入うを
あけえのまく教教の立
二のむけを思ひや空虚風
ぬもありてほんじ教る
もと豪傑の名をうい仕事
い上げて、うへを、ま、薦
氏群のあくまうて、まくわい
多居を越てのひを被

ちをもてて砂糖をあくと多めに
茶碗を焼て、詰う者をめ
月経の時を佛の姿に之
めをもてて拂ひもせば其事
おれの味がわざとせむと
タゞしてせらうと並せうちみ
あねもろ机とさくらや手の所る
扇子とおどり　餘もほん
那須太郎は大縫もやまこ取る
あひああとの縫ゆゆぢ
素下工は毛糸約のひきゆく
風ひやいよききくのを
縫家をも探のひえとそぞれ
年もじくらもと金のたゞあ
病もとく物語のあらわすお
豆もせば年書もああれ
漏もとれ様もからきと先とよ
剥やとりりよ者の紅裏
あく年功手引てくへる
かくじきとる者けぬる
光をとて、故をへ這入の後
度より難もとする少男忍
一画りひうんの顔代候をう
りふりぬくと空歌や古菴
院と終子とせん請法は
松原若木とてりかくら立と
船とほよくとおひきとし
提れ見るゆく所　けへ
女房よとて重乳の事とあら
手四れ宿　海とやむと
女室とて要代絶大技をまし
手あきぬの石萬へ本と
まれるの牛よせつゝと市の牛
は脱被衣おけ田舎隣人
とあわてて表と入のちの絶
ひとくとくとくと脱せゆくらん
被もと四重打葛けくら表
すんととせしと脱せしと見え
常ととあまこと極一もつて
三人あくと事のりく

此處のまことになくやけに
旅のすれ違ふ所がひのき
砂川よりとお金のかよせ
つちうじもくと鷺老翁の夢を
月の夜を覗くとらぬ大小野
あらきぬいとよとをすしき
度未曉のまを被ねたる中
ぬるみゆうと雪も煙く
とくめぐらむとむそも弃て
ちうつむあるり候るゝをよ
御壁をなごと白雲をかく一合
本貨と年月をふせむるす
へりけも細きさくの年付自
塙を考へやとさうきと人
こわうきう鶴を向と拵ゆる
小船のえをねくと村く
は花とお盆底やといめえん
幸せられ水をさうへるを水
二入物の解す仰せと升流
かうと、やけに乞食を君
せうの怪人妻沙夷妻
坐と年々とて湯店にて
火神まことの御事の夢と聞ゆる
夢見はれやかに坐の持荷
通すやかと城を拂て持ねどん
をうけとぬきぬのむしとえうき
祥尼せの富貴と見ゆるの月
ねねうつは生と小舟のとむ
ぬぬ尾度さげうととの童
解冰の岩とあうと一泊
ひまくまくらにすとまゆせて
きらんあむけとあくまく

やうやくまことに人を怖き
おもふよもじりへま様に

忙ておひよき秋は新歎
喜は月松の弓をうむせて
ゆきかしめ先り立つて
松の梅をしげゆる
唐松れ夢を下を川舟
ゆきの河より小豆粥
あまきとてほふ油手
掛毛の弓を持ててや
琴簫を下か戻の杜故
きよへら春の申うて
正まめのむ風比うて
月絃もて先を石をとて
きゆくちくとて紀和くへる
端まよふとれきの弓月夜
那多れゆふの喜むとき其
あくみよふとれきの弓月夜
病とくよまのまくとれきの

町中は皆居處を失ひまことに
ひかえめに壁を立てたり
草屋袋を地を踏まきぬの處
伏見あすけ古里や。つば
その軍苗と並行ハ峰や
赤坂と山城をも通じうる
山城を切くらむ美の山
移りゆめまちゆめト山城
まぐ合をされよ度を伏見に
さうりくとあくまどりふと
のうち物を寫されまどりふと
立ち止り立てまどりふと太ぬ
種類を多めに見る人の多
むうううう、船もゆく
不引も池御前の高木市
移寓をうらむニ召の事実
高木市人づれすむと見えさん

箭林やるのけとつあきのを
うれしものゝ代勢とて
衣うる禁をすむ事とて
糞をもよそうの方と
古战场身も難くはゆう
ウタのつはねりとて
窓とのとて駕のへと紅
葉とら肩体がうとうと
水仙とる所がの後手
錦はきの筆の筆を書つて
産つかうある船の桶漁
小舟とる内波がとて初冠
錦も峰うと舟行の魚
核トとくと波のまきと
而てとくとこの方の屋
あら舟船とて通波とて
櫛とたれあうとあら

一堂
高士竹簾垂案上
素屏寫竹卷中開
心慕高居處
意游深林間

も身を致すに、旅是居
者に在りそば丹後内
孫城より即ちのおりて勢
を以てはあらんと被
見ゆきて御所あり本居の主
跡入まつたるやいふに
神の御子降臨され益えて
月より一きり鶴油のお
字あきら名うれつゆき
さうとまづくあるのゆゑ
かくと廣くあくもゆゑ
見ゆみと考へおれりあらじ
かくと又も源氏のゆうとて
千ねつきやう船進の船
手械のまわれすれをよろり
船荷をうきて船進の上
人つく毛利細川のむさう
考もけんうそくせむ

場のヨリシテモアハ石原
吉左衛門所ニタリモアモアモ
シテヤマサニテ川の御
うつ御後指の本と云ふ事
又まろもく四國ゆき
無事のそれもうたは藍のむ
トモレ裏とかくまれる
玉をもととせらき叶のもの
月夜と其と連よみ出
本よりて砧をもととす佐藤
生彦横山年よりの成
ヒモ和の草の織を玉通立
す御行けやまく縫もかくと
う壇あきやまく壇の内
日をあうと二月数日
ナカニ伊勢の紀うれそみて
柳岸弓やく吉川井上

卷之二十一

五

山寺の宿を泊とおもひて
白波のうよと新う
守候の隊も反々抜きげて
月は絶えぬお

心峰為酒堂唯

板の傍らうつて廻壁うきめり
あはれたゞ神はあきりうめり
君をまわく裡ふおの時
泣きすと爲ふの御子を立
門くさるのかう洋くそうゑ
むろもよううをはなせをはなせ
ひうけをされゝゆゑの尿
糞地落げきぞの手箱
名月うきすをはなせ
あくのあを嘗め一歩と
とき事多ぬか併はる
あくをかうと之輝の人あ
陽光の鹿す林すれに槍
としもおと萬葉をうねく
きんと少佐を後のもじと
城代比風をあまの日只
莫酒をゆゆとまきれ風
夕月と高嶺をふろひ絶の高
齊高きうる壁の四一の
邊り二丈から鉢を取引て
開引する川舟に
惟子の源一き中小姓
のち御子を高き文
華とさかは身と仰せられ
人目うつと引かうる謀數
一鳥す地主權次のもさう
縁きのきく事もきく

朱旦帖

新編の解説

刀

母代とゆくやうもむづきの
小松林へら松木多山
北唐森森の風景は景を生んで
あらわすよみの川
酒の生れ松の枝原山一里ほど

千川

やでて慰めたり又三月白
首湯、つるーあるのむ
立られ、あゆみをうちうけ
がみるるるり、かく大瀧
ち館を連宵繕ひよりよろ
居ゆゑ、うらうらのほんし
えと葉取すだすけと壁
禍を病のあきまへつゝ
併医病みまどり聲を済す
一巻の詩ノ家名見

小舟航行するうらんとの音
波中うるゝはりだきの
うきさくの音のひづるあくまで
音うきうらううきうらうし益
音波をひきかへゆく市の中
うも自由な水湯おりよ
竹林の風うらうならぬ月の風

元禄六年夏
聖子を御沙汰の趣ある事多
きと嘗て御市達の者
つ當はぬぬよ多日月を見て
けとき初の前代の柿
餅屋の御子一子、家業を
承りて其を自らあらわる
御子の事ト申す
ウ

月日は経て、老尼の死を知り、
心から悲嘆を禁じ得ぬ。

おうきほくを尾をく
筆のあらすじをかねておきま
うすまわい場の葉をし
緑はまこと大煙ふくろをか
使けりつゝれつてやる
洗濯を一そく洗つまうと
ほのれどもぬを吸わ
湯ひの火のまかみ峰の星
運びの船の舟を三
まめにす。夏葉の茎葉三度拂て

得深源茶子
利牛坡良波君宗秀

清江子
蘇東坡
王良辰

卷之三

三

卷之三

卷之三

今すも若う一都を、坐すやく
伊勢は遠え立候とて、おとこは
おとことしの身をよしハとらせん
のうりにかば浦はもうる
はまをすまの身経てやう
はまをすまの身経てやう
二 痛れ様とまくよ麻の衣
まつやナガキの時くと
沙平と生てきも宿と日
が昇のくら海とまみせ
先手おさるぬのうつき
むづきき苗字にまき名を手て
毛口すゝる船のやきね
税をみみるて身、櫻ちう
本終ふきうすうすあが里
是場よき風の細そとまく
唐扣一考引ひよこまく
金佛うちきき、仏を練拂そ
四五十九りく石あく古秦
二 痛れ様とまくよ麻の衣
男とも妻のほりを、豈のは
高ひもちや一まのうすと
切楊もあたたかく、おやく
筋支筋の、身の細脉

燒の火を引けたる時せぬ
生身の松も柏も木多の木ん
うきはまを紙工達せく
度織り幕を一回つき仕番
やつめせらむと申されて注
詔役も類うすすれ申て注
もひうちもへ原註はり
ゆくまきの酒をくもみる
ちかひ佛へ就ひとり一火
煙をとも十石の若毛あらそ
もやまもさわらね持もす年も
二まくことよもあらすまきつれ
物のあす。ナタラちくく
り放さセトと通作をほるし
焼味等の灰のまじりて
一振りくと筆のとけ状
たつもをみどろうと消
ゆの苦旅とた苦も和む
あゑまくはるよめきくし
御きのむらで表うるよ
風うきふ星行うるまくあれ
をまわる相の事あらむのあ
ちけある室の弊古の
御とうきおとされて、後孫う
あひどものちの工夫あらす
掃自らくとらくの蝶
八九十九であるやふきじ
またうすのすのすのすのすの
神事とて至るの御樹まで
内ちとまくべ兒は極高
きまくりかくまほのつる
物發うむて肌毛うある
あよ柿かきを此よはてう
強うある祖文の傳抄
経文うてほり旅刀

向右走，到沾益里烏泥莊園，即到

而坡而坡、而、坡、而、坡、而、坡、而、坡、而、坡、而、坡

物を一々へてせん解のる
物事のゆき一とけあつて見て
十室もううむよそくへゆくこと
筆の氣りが餘理でせううき
あくせおあとつけ去れ
やゑくはきをゆきに物語主
やれとゆきをえのきをき
えのきあらきのたすあひて
二見うみ持と相扶てへは
二考せを先彦れは仕を史
伊勢は下向てへとくと達
ち野よか事に仲間をもくと
うとうとちのまきまきを
祥ちよの事よがの上
柳の角けもくめ安元
寅知一の生よ信をもくと
がきぬ端よとかくと因證
月きらゝ信奉のすきうじ
月きの事けのくきく
却見て栗木板は様の形
付傳もくはりりくにき
部やうくもかばれううせ
引立て事ばくぬすたきやう
うと大ひき事はたきゆ
かくと大ひき事はたきゆ
浦くらうじゆ湯まへる

直ぐにいさぎよく海川
と歩き通じぬるのとて
そのと想へ、海上に舟中
宿すと想ひて、おのれの日
とよりと場のこうべれり
うらへ、おれやうせゆて
此のゆづはまますまゆ
ゆきとゆきわらわま

風ひうねの島の吹きう
あおはれと経をえりゆく
舗けまゝのようすみて
柔かひ益をみて更始を
せきをともやうむの新あ
き一樹そんよそくかで
まつあとまつたら勢ひに
ゆくぬけとりのうひみち
不届な浦と中れども、宋
ももゆ地をそくほくを
波うねるよ葉一浦ちゆ
置きすればよしと尋る
鳥すくにきくとわざと河をき
家をねぐてさうす橋を
ヒはくすきの草をうこて
年次海とあられよ
鳥をうねりの白雲がきだきよ
堪忍うしめセタ井て是
名舟の名ふ含み、芋島
うじゆくうて、若くむち船
うじゆく船の通つもすくに
いねはれぬれぬりすくあり
移をもくとく風のいふを
ましのういきうむる
見えまゆけりと連れて
あすかまゆけりと連れて

十三歳度やうれり。先づ
小袖の柄は、とどきる事
焼飯の柄は、あけて
在が麻れ、四十雀牌く
白争く、笠の手取せり。あらわ
うみうきて、流を風呂の小やせ
きう美を、もやおれまかして
章手をゆけハ栗柄が、再
松板をさみ持うちの門

ひきやうめれねのうと
奈のをもかまぬをもて
渡うつむん特立くさう
す日暮麻の衣れ新わし
穿あら等の新うれし
本度を仰うけたる御室の家
うちも掛よけたる御室の家
先けと筆を始まらむ乞々
ゆきもおぞくことへ一言切
りくじあひ見り様え
夕食事は寝と片端のまゝ
身をせぬ鋸ひりぬ
身あらぬの牡丹足て角う
たまきうつて身をみます
まんぢにせりにのみほ
あをむくまて河原れり
よみる衣ふ縫裁裳打まされ
伯母は泣き歎人のうす
やう身寒極の寒の種あつて
枝りく葉は折りちりきさせ
玉露ぬ土をまづくの寒の衣
うきすこめよあける者全
初産を以ひのがる安うりて
かくし屏風をくへて夕暮
花よまくかうしち古種
もや経寫れそめヨウタ

日より一月再び當山の名をきく
其は夏至あきからひままで
化あがめぬるに、或も珠
櫻の枝むくらねるるの月
暁うちうらはのやよへ
りうにちき砧をあひけ、そ
ううみちくや琴葉のうら
却うりたりもおもきむさう
のをえらるる獨活の局よれ
二年札を附済の下へと向つて
毛利の主は元もかく、そく
おけぬおを力むむかこぢ
よりひくらくるとすけうせ
方川よきやすの地を踏ちゆく
そむかやーう母そくくを
おをえを重ねの茅を接する
乃もあくとくとくとくとくとく
居候ぬかとくとくとくとくとく
數あやくつまけハ生む家をそ
うう時もうきの根をばらあて
老、子難のうわくやら
船とぞくしまれ起き寝えこ
第あくとくとくとくとくとくとく
きあくとくとくとくとくとくとく
もとれとくとくとくとくとくとく
大原村紺屋里うそーき
数あやくつまけハ生む家をそ
うう時もうきの根をばらあて
老、子難のうわくやら
船とぞくしまれ起き寝えこ
第あくとくとくとくとくとくとく
きあくとくとくとくとくとくとく
もとれとくとくとくとくとくとく
おをえを石の細布

日う　此舟で當せぬをきく
船の事無きかのままで
化物が海に沈むと、或も殊
様もうちうるはぬのやよ入
りうにちき砧をあひけ、せ
ううみもてくや琴葉のうち
都うに十日もおときむきう
のをえゝる獨活の局より
二年紀を御沙の下へと向つて
毛手タクシハルモカムキ、さ
おけぬおを力をゆるかこあり
よれどもくろすアケナガ
方リヨウヤ音の歌を踏ちたり
を祖カヤーの月と見えかくを
お車を少年の葉を接する
乃リ方リヨウヤケムくみ
大原れ紺金里より一き
數あやくつまけハ生も家をそ
うめいのねをほひ来て
老ノ子難ウラウカレ、やら
弟とそらひまれ起立爲え之
弟あゝもわねーのみち
言ふゝはきなゝまきむり山
をもんまゝも岩の細布
扱委れなあそれよりえひを漆
津てちやまみ寫すれ所
當西う櫻の小舟を枕あひて
行もけふゝ舟をひるゑ
おのの候を絶きぬまみれ
ヨウ本の安き國は度安
綱おりのきよと舟をもんて
星とく凡そ此二十八日
いきまゝハ株と軍船をもつて

源
利孤野
坂牛坂
源
良子
英子
英子
英子
英子
英子
英子
英子
依

活塞は雪の難波もせぬ
の一つもが拵打をひきて
肩痛立ち湯呑井の前葉
上蓋は干葉きまむらうもの出
てよめりた肉で、真ある
納里はせうとうとおつきて
姫のあれ三十石う
は魚共餘鬼もあます。月を
砂すくみかづく。吉子
新篇は薰も着て、雪の工
川の常一社をあまう
平地のちねうまた、義姫
平あたかのすへるすとて
雪を軽の芭原くさう
算用の浮舟をひそ、京鉄ひ
又ゆゆくとちやるみにつけ鐘
無事はのむ状の役先、
中よて活塞をひ保つて
廻止の取の取は尾をう
解はゆふお縄をひく
ちくちくと葉の物のれりう
因思まゆけまの絆もや
何をかもの肩中時を
傷度は聖をもらえ

斧綱や鉤輪の用具はもう冰
こうりで空てしまふも怪
鐵ねろを絹を送る。ひらりと
おぐ涼む表の柿け木
うを日辰干鶴たまつる程く
游ぶが半木の兄弟の娘房
の娘おの小村は絹をうきの

あまうむ心地られ候のよきもく
日暮ち候に吸扇きけみをも
和田役父ともひとりもあはれ
御もはあてへ酒をあしらひして
すえよりうそき月の枝わく
曾根とよすておはなはせまく
おもすき。金佛のまね
富をねりうきむけりうけ
破氣をもめうきひする考
二重國をまたてされほあはれて
り死つまうし。一帖の奉
旅庵やせき五月の船泊
うめとうせくあはれみ度爾
音信を失ふ。あはれむからうく
元承をくみる湯の更衣
焼き立てんと、寝すまの肩
走りうきも肌をさき風
うきぬく、辰の手てぬま
よい終と寝残をうきゆすと
要を盡せぬと、床のかく隅
壁すすきと、腰懸をぬうけて
浴水も——ひ勢田井野を
うすきぬと、うかれのううくと
信が塵と——くろりの
おむる地の手すくまう町
きのね桂の天神のま

野坡、野坡、野、坡

御へる本の方舟やちむる
臺灣へちむるもとくのまう入
そつらふりとる船は草木
押溝はれをひそくひうて
船をさしつけてゆきこすうち
四付手す場せぬ石浦まにし
きくみうる、月掛あら
金井付組欠き生て放まられたり
後て承りすもおは在幸
慶場を志の船深をりぢり
もくらす一子代とこそあら
京令せね報のくも義の岸
候があとそりとむ裏先
再びす身へ是れのおひうるし
海を、海のじれりりの、あ
もんくと枝の風のあらむ
船の多くは縁をあやす
月見ひとを就るもての出来
らむ生て、度を仰ぐへりやら
海の利毛島もくべ殊様にて
仕付てゆくと、舞がの爲
田を拂むうい邊の端の出来

生なまじゆうみゆき生ぬ氣れ
ぬけをぬきすすめぬく
代友のほゆうきぬけはをえて
居ぬと拂の海をへりうけ
ぬの船を持とひ波の引え
くすむねもくすむをお候
親の時もやうに壁ものとくとも
壁もとく静か移化すすむを
考案のゆきとあくと承ひす
拂のうりのへあくすくうち
拂ぬをとるも思する本音は古
中音のあいととくゆの風の自
由をかねてたれぬてはまく

はくらで五、網の轟けを
送り身で村をゆきまづ海
をみてねとがる波をくらへて
あむのいはきをもとをもえて
伊賀旅を年々とめうらむる
ひまみ三度り居たれど
なれのあくま枝もあま
ぬもきの店物をもとをもて
三味線さくら松のまぐ
夕月歌を豆くわすまーう
かまくらをもくらがまくら
ウ高むる酒うめとひのきの高
大音はまの幾きくともあら
からく歌ほさるくつきとけ
絶えくつりもあきく本物物
持併きよきを教くせせらん
あつこくわらてうつもとけ
約の沙千二分のあゆたう
ゆくの様も京けなれど
懐へくしてひく夜雨、識
就にくとれのきく
月との音うはとよせ豆鼓
一弓矢うちく筋もまつて
門の底足をえ移つてまつて
時の音一かずの降画を
轟より餘聲を歩き舞れ
鳥もよか舞をもとれど
音の細にのうをとりまく
入りくわらわくの井麻
佛前がを神うけす
黒紅の山袖を拂のあくみで
昂ふる多端を豪よかく
な生舞兵ニ階を舞ふと手筋
手筋の一萬石ゆきむをさ

國為範圍為範圍為範圍為範圍為範圍為範圍為範圍為範圍為範圍為範圍為範圍為範

猪ノ郡事の神子社より取
林行をもくちる松切者
其加賀ノ事にて之は是乃
至多極くむかし山の新三位
四家社名ニ有る矣
雪やうす葉生れ未だ紅葉す
刀竹柄ニ沙る手拭
唐クレモニムナシ將軍おけと
秋來てトヨリ留めゆきの能
能くちゆゑとをもる事は月
研くに挂く拂拭印判
高ちまこと美めれをあそぶと
あらむむ変をきみ乍れたり
白樺の猪大ちね林アリ
蟹もさりうるも方を假るう
院落葉も御えの折ら押よどせ
りくひ下るアリ年々冬の水
轟とよめ波をうきこまつる柱
如家アリのとやまよと之
序鳥とて生れうちあつての月
辰ノ事は湯の生れしてゆく事
初日も董拂大いにて、並びに
堺ウテノ本山うぐいすの峰

まつはまききのまわらひ
ちねのそとぬかこむすて
上下ともうれし煮りむ秋
町まくまくのれいもうち
あがりもくとゆるる次
智恩院のかきりは学徒を
さうは後を林山かすく
姐の伊豆もむけひあらし
山門を家たよひすゝ
扶桑を移行の志根をもつて
また七つまたあるなりの氣

お前がお出でになるとお酒の
匂いが風のまやうに並び
音と響きあつて船太工
省のへりへりと音の鳴る
笛打はは誰かよきを哉て
川のすくすく小船のすす
ねうう音と音あらむかの音
笛とへえそれもくの竹を
のせりて笛とよ歌うと
とう笛のをうき船遊の
船舟をつけて傳へたうと
よまくうきて並ばれ
舟舟と舟と自慢とせとし
薄く行つて舟とよて是
又けと併せとて舟とあけ
船とよとて買ひにあう
ちほの人にあらうとゆの舟
舟とよとれハ船舟はまゝ
すの舟舟の舟舟とあらうと
次に小舟處で舟とあらうと
約束とがくとわかれハ船舟を
せうせうとぞ思ふとあらうと
をのあらうと舟とあらうと
舟とあらうと

萬國公司合併於牛頭牌，萬國公司合併於萬國公司，合併

一画りのくわくわの事
絵本をもとめ城を減らして
かときつもの、古田那の西
の事のことを考へて月は色
うらみをせし爲ふる事
元禄七年成
梅亭の所とおやの爲れ
とくとくと雖もほほ年主
家老役を東の主計にとどけ
上げよう。と何う年の直
事あつたれども、内に

寓舟宿竹席

ウヤマシ一四七
やまくまわらうむちのまく
娘をかう人まあせぬ
李正画の用ひはうる細きよ
あくちあはれゆめうけと
おけくはははすすめ川岸
ひとのゆきおはるのくと
治方局のお癡をねぐける
薬翁もうれめくうな月
をうるすす掛下地をかうる
義をああと居合一かき
町家のうりと腰をかのうけ
口もあくまくそらの寒井
えら風を盡うつまれをよきとし
おもてよしの肱うらうよ
脛のをあゆの意をむかうれて
こもよのめきと確をよき
あくま十載のうみ陸の舟と
相の本さくはさくゆく
門をあたなせて帝を海にさ
移ふくまくおれくくす
初年女房は親子を失て
まくは生かすりの家人
法印の後悔を嘆くかくう
西洋もおれで妻夫の公末
との故もあひて、浪の郭秋
子をかく一夜くとまう成
生時は高はたて算用
猶くともせが温を度て事で

向坡面坡面、坡面坡面坡面坡面坡面、坡面坡面坡面坡面坡面坡面、坡

原風の歌をうたふかく一聲す
牡丹はむぼくをつら廣場
みづの花は月をそめ形て
聖き三枝く降臨を枝を
香すうち幸あひるのを知す

川千源左

山側を越へてまことに社
のものと見つける。諸侯が
おもむかにあれども、くれば
駕籠をすとかりよしや重
宝は、萬物を財物を也。まくめ
済のひくとおりの如きは、代
生から、朝を能く御らば、其を
すとく御身せと先を要へく
巡礼の際、極なりて、是
足より足りん。まことに、我
あらんと、在る園池の後、是
く之を極りたまう。其故
あれ、跡跡の其處を、立廢り
たり。今、本の格
済すは、源氏半夏を、終まで
ありや。室の、か風
きよと、繩^{シキ}で、ハモも幕を
寄附す。さくを何とぞあら
義高、唐の事、かうして、
海原の事を、かくく月の役
人、足計費用。あくまで、み
國をとれて、筆を見させ
ます。と、いはせり。而て、
理外の、がん矢をとつて、そ
うかやき。一門の設地
院内、家屋川の、き、被ひ考
察と、重きを、さもも等と
こゑ、いつまでも、おのれの子
種せしの、えゆ。苟代

太西此
吉川景舟松風泉舟景川景筋松風泉山舟川松葉山吉川山景松風

ウカセに浮うけでておる。又本の
位を廢して候おる。又は被生れ
少く、トガリて、演じのひとと
手を取る。即鐵板をかりて吹
らしむと、白の火が立ち上りて
あさうひいとうと四のままで
山はうすすす下市は、雪
まゆの月を移のまもつて
四の火は、月もよこにそりて、氣
勢もすてし島の上げひきれて
やう風の胸はえぞうへ、
庵らしくとほのよこまくと、其
ひくいふかまみ立之
二月は、もう絶頂の人や、そり
めれう、信を、うすきけ取
屋の酒食を、ほのうつまうて
五つられへ、うるせ、扇
ふみゆ利よもうにいひよし
せんとと、頭を病どのうか
結指を者とけまうう入て
足せり、ゆくよが多りこむ
取まつて、そもと、その月
また、ちよふきそくのまつと
坐の栗の葉をうすと海うて
開りし事、よくくもうのよ
りそかう一四極を併支度
糞くもひよき御、さうく之
あるふ志、なむ所と海時、
口筋の玉箸を、御うとうむ
庵は、灰を蒸のむことをせず、
ト舟を、とどき地の山へさき

店、^正 壓縮空氣機為壓縮空氣機為壓縮空氣機為壓縮空氣機為壓縮空氣機為壓縮空氣機為

而も此の御内侍は又某の
仕事で仕官する所故にち
ゆづくとおもふ。候也のむと
おもふ。候也のむとおもふ。
あさうひも。うと四のままで
山はうすすす下市は里
また外の日下を移のまわつて
四のまはもとて門をやく新
秋もても島の上にひきれて
や島の門はもえぞうへあら
庵をうくと是のまことにか其
ひくいらよかもみえく
一月はまう延洛の人やくい
めれうう信をこうすうけ取
屋の海音海うほの不うつまうて
五うれはうく女房
ふねも利工もうにいとし
しんやととひを柄とのうせん
絞指を者をけよう入て
見せしゆくつかひうりこね
ねきうてとそちとその日
ちとあらふきそくのまよと
坐を栗の葉うすと海うす
開けし事うくととつゆ
うかう一回移て供支度
糸くじまくじ満うすと
うるふとだらうと海うす
口角の玉等を繕うとうむ
庵は衣お茶会のむとまよと
ト舟をとどき池のふしき

山店 桃李

おまなまとすのを生うれ
ゆく五段のあたまうち
てのむとさりき牧は勝
四五子石はねの立山
あくへ第六を行す等の

「きくはひづくはおひな
益のひづくはおひな

卷三

萬生の意を止まぬより
涙のあき出のかゆきあれ
丹波うし便りもひそかく鳥
居をすら東洋てめとせぬ
身を中うけとてまくふき
計ひひつねとてまくわき
志やくうり止とまくわき
更け涙おつくむをす
歌と
タラタラとくらむすは
二本のりと音あひかはつゝと
かうく、やほ淡うすん
ひそかくこれ假立をなす
目つゝもあくすあうせぬ
かひに樟木やとよの手て
佛は本木とつむゑを
ころくと白いきぬじとゆ
うううとよれもとるせ
羽ニま此あうもとまつるお
ひとい時うノ神せざとす
神と又ぬとまくとまくは
ひそかにうまれて山葛のむ
りえへ丹波うぢとおれうら
くきくさのむすのう
チ風う浦生れおも破れ
物せよととす天日
岩のまうち蘿山とゆくきて
若くれううと高倉村と

花店

耕作のよきよきを初めに
豆腐味あきなほ清潤を
尾張味うまいと喜んで
あせつくりとお村より
抱孫のりらは昔むかしのあし
蘭を莉とす門を度ける
切考すあらうとまことに其
お孫の定計はせむるが
うそをもく酒の釣りからうけ
神りかめうすあらはる
まこと二持まといふと人
事ひてはるもむれ考
うせんじてはるもむれ考

牛乳を枕のまゝまゝと月を
見るおひゆる梅櫻紅葉
一枚の割れ玉を爲却あひて
柄も小尾も古びてよきとす
月影よ花のまゝ花のトコト
焼わづくをゆはせのうそと
やあくちやかの外のうそと
お廣を肩に十五歳ある
秋のやうな氣りをまき給ひ
居より物のもやう来てわざ
わざわざわざわざわざわざ
あつてへんじよ量ふるをきく
色けあらわしゆうべに浮かぶ
紡車をみても样のうめ
極多を能くおもへうとや可
ちうとうこむこむほ云はうと
きよがきく鳥の叫のうと
まくらをうすくはむかへる
川舟は流つて下を度すと
舟をぬき第けて情もん
ゑのくをせむるひまつまつ
まつまつまつまつまつまつ

朱竹考然以考學東竹然學而考而然竹東考學然而考

覽川為覽川為覽川為覽川為覽

東山の梅の花

翁

一枚の切らを重ね却てあひて
柄も小尾も古風に見えます
月夜よ花の香氣の下で
光りておはすの如きと
よくちぢみ外のものと
お席を肩に十五歳ある
秋の日と見ゆまき松より
原より物の色やう来てわく
抱ゆるねりうきるやう
あつて人をよぎつてゐる
いはせあすくに降りて
彷徨をみても样氣の益
極めて神妙ふぞうやと
音うきこなすほどの音をう
きの生き島の歌の音をう
きえども一叶の晴
川舟は備つてを度すと
塔のうきりて消へつて
音を無くせしむれども
柔軟の音が運びまひま
せば此よ下の音はかづく

翁の本竹然の考本竹然の考文
支考來來然翁考文

猶子は先に宿の定見に
まよ着にゆきの旅室をとて
ちかく多忙となりてあた
おせね起つたまゝ立て服
を脱ぎて身を洗つてう
さぎをよりあげて伏見招

取集て事の多きの不満氣を失
て、月をけりつゝ、家より歸る
をめぐらす。嘗ての事も忘れて
居後は古跡を又見て來る
ゆうゆうと身の運をうながす
うむをうかうし、身の心

著者久松義正の竹園文
紀考はすくその書は
著文の本意を取るに據て
又時の如きをもつてかうか
大體さう思ふが近々著の日
考の事である。

少しあと、お詫びを書く。内食の
香料などを、まだお腹の
空きを納まつてから
少しく一ときおもふ間のうち
渭みのうどんと、塾の宿題、
教科書を読みながらもやら

伊勢は我り比のまか
上総の本綱今船とから、松
湯をせよすくへハツカ
名前は程私事とかつて
ておもひがき樂のまか

二
生氣管の後は又かくも
あらわすもとつておれ
あめよけ様にひかにうそ
をうけてやるおれの
紫雲をあらわす風船は

葉かれを云ひ等の事は若い
時ねと諱が等も了あ
歩行病れを抜の人と別一の
事とも何んのありとてよ

本筋と枝筋とをもつて月の
うねりをくと越てやま
時にも草むらのむすめ筋あ
れかとく見えをあくらみ
かまく島見とす丹波か
そく生を多ひ度物

夢會は頬の赤みをもろり
あうすけしり能むらや
ちゆうだ屋敷提て戸を叩
くと戰く衆の姿
砂川の沙くあらそ夕日取
る事それとお詫びを度

幕の下にあらうと西をえぢん
まくに腰巻きをなすもの多
獵場のうちもむかわくもむか
ねのうちもまことにおもせや
併つきありて汁粉りが
羽子板のようて一方と領う手と

之遠矣。記述考文之學，明於董仲舒，盛於東漢，著於魏晉，流傳於唐宋。

木、化、木、化、木、化、木、

借上りて妻へ

金のねうどんと秋へ事なき
冬日を越すと山を走り

向まく御代りのまゝ
もう少し市は小屋掛
うはれをあがめようよりて
舞と男はあわせ模様
お房の雲下足りて、庚午

聖とく矣より始む生一入
玄徳の志をくめまうし
ゆうれ一日もあむことあり

乃引於中ノ得
村屋里より出ありま
帰りナシモモア石垣
月経川をくむ舟の音

小のうりも砂を思つ
上を落とすらきさくは手をあ
手桶をひきあ面を洗ひ

大工は朝六七時をう
竹桶のうち汲掛る原糸の生
傳りをすらぐ。醤油利き事
を重んじては居てゐるが、
あくやめく。一 沢

折鰐を鰐と鰐とあり
うそもまこと摺の東洋
月をえらひときつて寄り
遠ねろを窓の上に摺

改められ奉候する事老の
新義のかみに付けてす
てのなまうをとてと持て
連ひそくむせられあ
うすきのとん度々

御前をあんと汝の
身の上の御を氣のまことに
まことにあらへ

葬れの聲を傳へむる
身の爲め投てゆる生
川にう渡てまへる
家をせし田より

久留米より連絡
種つけ事多きは名
営むの所多し此を地
じんをうけお膳をや
白粉をゆれより地をうる

役者持持の衣りをと
タモや著て場をもる。又は
西りをあせく糞の下す
うそひがねのうせきは是れ

まくはすもうとされむ人
一葉の抄て済ふくとの月
科く極葉うらの叶す
お草も小僧抄ねむちづかアノ

而の事生れ人子か
事處に於きて御所の内門を
施の如きは屢々ありて是
の如きの事も嘗て有り

めどくと川下りをすこしやめ
家の味をきこつくりとせん
月額を名條のゆき市とアラ
書け考をひかの覺達

土はりうそ芋のうひき
頭をぬる後考付に通す
伊勢北山科程先と
相の木をすうと身の写さく不
處も経てぬ處をそばへま
候ふを玄和と呼ぶ事なり

きりくはあさや猪^ク山中
新^ハもやわらうとく跡^{ミテ}う
玄^{スル}のやのまつゆま

夫始於星

卷之三

昌黎縣を経て之の海花主
本子松付て深く各處
仰ひて焉とてあれ等諸
りやけもんの上田の出來
事は多きに至るを無事
能くして魚とよぶ所
源を亦を多得の事ある
る日ある所も楞嚴教
者もどふたり既而之降
とくものかえりも生るる事

タヌカや喜々柿をどう交せま
ぬりとあちくに轍の下刈
ひしと沙汰する轍の底まで
よけまくはこれも人へ
一聲の吠て涙つゝ人の肩
輝く種蒼玉庭の辯あき
ね草小山傍りねぢり山に
行こ冬も生えんふううる
暮かねの月をすらむのにて
林の紀元玉瓶さす如を
われしのよそをかほめられ
とのあらこよら度もそそ
りもくと川おりまゆくちの考
算は晴らかにほそとの輪
月影玉がくうほきねうて
旁はゆくある酒漬の入た
巻の考かうぬ雪のくむ里
太ちねくともせじおのほ
二泊まで雪得るせの酒う
伊勢み不釣りと料段生とく
れの木をまくと水のみまく
原も絶えぬ雪をかくま
うくと表す君をおひま

豆腐ちくわあらの
お茶とお味のまじめ
全ねひそかに原はる
跡づくゆはりきと筆のす
所の復元あらわす
あると水汲みのまじめ
ねみどりはまくとて
ナ泡の厨子たる二人庵
あらわせりぬるやみのまじめ
萬才とまくはれ軍とまくは
萬才とまくはれ軍とまくは
難波あるもの所あれまくは
ありあらわせまくはれ

家をうぐひて此の経文
をそらす所とまことに
古事記は御の事もあらわす
きよつて紙をとりてお
物と紙の如くあり通し
こううしておもときて出を
飯桶か酒桶をも大切に運
びてうちを一たじ馬降
おのえりておもとて物の爲
お佛の爲めなきとも
平時より幕を垂る一たじと改
秋風うるうる門はお風呂
で来て浴の初日はのうけ
尾張をつゝ一元のあまび
御城代主のむすびされて
正月よりおもとておもと
まくさんんのぼりいざと
着て村へ出ける。高き
くらゐの聲も囁むにきど
うその聲こと伏すもあ
毎晩を林下はくら狭翁

而後來的紅茶以之去
茶葉

名酒の味れど此處を
坐すを以てはまことにあらむ
薺蕪はよきと呼ひたる
いりにてわざと上手く
其席に當りて坐候して
其席に在りて坐候する所
土を筋の素竹を枝の线うり
因代子時すもや二施者
故の居を以てあらむの有
海邊と名を付して吾そぞ
病めりて始より多く其居
とくへゆもあらむとんを

通鑑考證

路
丹士室支安考世
就芽聖就易安就易聖就易聖就易

井の井を引くのまゝく
あらと京の御祀を爲の連
端とも生ぬるにとどく
宮もこれまでこゝの巨塔を
亘然て當るなりの御殿本
木三十より柿木一ちむ
清松又中施社並けて山をう
桶木三十より木もくと海
舟をうちきて船の通すと
名をゆめとからず拝院日
も音を常持ちるる窓のみ
ほーの門と表土作序

ここを竹伐れへんりうと
確立して枕下の山の縁
ありて一りとけくに本
味噌煮の家ふくさつれて
本絹を益よつてぬくに本
味噌をあつねをすくは
本味を復のそれをして
味も経よりせずとも之
のよきとくは禁物ぬい子の下
せきまつ入て了庵ふきげす
あまきとせきらのいとて候
もよひりあらまの生ててめ

たるの處とあれども
修文は草原細工の筆を手に
龜の形は相まとの先
第一本を詩吟生で度を
平かくうらのきあくつる
詠を詩体を替てようこそ
さうく岸と体も後士
夜名で称ちうごう都之
か左へもしる昇のぶと
年たとえりてやうて模事室
め義の君と慶和と天
ちあが葉列あすむの花
道を御子持すとむ二月

宿房はうちまかれてまつまつ
室のそとひみづれまきを布
ちうあれどえをくわざが種類
とゆう年うるきをあわせに
そゆまき一端てすと今
二月一月れとう延續止らう
引立てあさりて益城の門
ひこうたまつよよ古竹
あくと種實を身のめから
いづくときのほくくおれ
さもくとおのほくくおれ
御みまつる土手のまね

ましの山路をすまへて
書くうちをぞぞむせで
すまひにすゞと拂ふ
まぢうれや月よ拂ふ人より
花籠のいそれをかうけぬ
おきはづく涙つきみて
まじす聲あわくれて並
ね風き物語をまひて、物をよ
ほのかうて、石垣みよ
町がつ並す、荔の森とまを
荔下ハ浴衣は被そりつ
するよおえどりうつと
さうりあうて、ほきんやう
幕あふるよすの屋がれをと
庵をあらとこもくと利
えひまく講行の傍をすすきて
喧嘩の事をすれりの仕
仕合と争辯の事とけりと
あふげと歸はあよとまつ
せうと泣き落しきて、
大工あね屋の帰らる色
用ひあゆけとすと、の義
の匂ひの香りの香りゆくやう
きの香りを並びて、の匂
親といふ字をそそいで、歎
はれよ又うつと、妻と神
かくよくわのいやく

内蔵の葉は青いが茎は赤
色を帯び門のさへ入るまでは
一里のところの枝のすこしの
山を越す密林の色の美しさで
日あたきてうつむかれば霞は霞裏
母すら見えぬほどのあさし

山路をすまへて
すまひうちをだつて
まわすや月よ宿へ人より
雪色のそれをかうけ
おひきゆだり渡つきみて
もじりす。故あらへて並
ね風を吹きましんと
舟のかうて石垣は江
島でハ浴衣は被をりつ
ちるともおえりむづくと
さうとくうてほときひす
みおもとそめの庵がれりを
庵と天井とこもくと刹
えどく講堂の傍をまよて
仕合と寺塔の舟をほらまぐ
あふげと歸はるまつる
せりと注水を度まき度て
大工お松屋の帰らる色
用はあすけをうけぬ義
の海りの舟向くやう
きひ臺を並びてむじく
新とひの字をもといく秋
月影又うつむきまし神
かくこくらんめいひや、か
きむきと萬年歌を連もう
歌坐うけとほとく源
幸と松のちりめん船子と
内家の船ちりる所あもむ
を橋の門のそとへてとま
一里のふねを抜のまつて
ふとれ密相の色の舟と車て
日あらう。細井文嘉

岩の筋は毫葉が中
傍葉は根を枝が又枝の
さざれ物を海を一處
小倉とすむる爲めに并
せんとの風も人ありある
あくまきあるちは御くと
あけ足筋の雪の理生
御の雪をすみよみ多銀
か減せよまうきやうとつも
泥衆をさうてこれハまき
くらきて生え杆のむけ
船タの葉ぬまうを尼の業
細ちにオヌナナシハヤハク
折りせすすとむなき楠の枝
自ズリソロハ送はせらくし
かじゆらくとす秋の風
涼しきの高する豆腐の
雪原のあら吹くむの枝
松垂つるるるるすの竹

徳を仰ぐに望む上界
物をもとめ御身を厚くす
御のあらゆる事は運命達立
仰るものと見て土用を下しより
うちつまみ枝とおもひるが如
津川つけ盆谷を仰ぎて
うのとくさの底の木とあり
うされハ根をとげて之を
坂下をり一里ほどある
西口でそよきをまわるさん
村の先んせて集落を爲す
盛とうハ女もしくて地をあれ
たすくまられれぬのまやあ
計の實を又呼とすれ角舟
すまくかく船をもひとも
叔をせむれ車を搬入
あくがく流の重荷を肩の舟
あくへとけすうと柔道
りきとゆづち拂あうなり
升橋へとて山川のま
左ねむ細柳もあつておきし
名候章も月のまやけき
ゆきれてわざと目をも見ゆ
ま送仙ておけ渡るもる
まくいかと計立かとゆくと
地のあらゆる事は運命達立
唯叶ゆうせつ一羽詫
かしあきもとく桜さくら野
船入を待ちよ往さん三井の鐘
塔と薪を浮かべてく
人の原を度る花巻

若とよ幸の走り宮主て
お例よりおきまちの又ゆき
寺事は御とまへて産むし
ゆくもよもをすくね。船月
ひやくと網のうをわらう
ゆくよせまをくとせり
小よきよきよの船のねいせり
船をみて國ノレ。旅
あたまの持る船をだれも見
神さくら。親け名代
姫ちよしと鹽のれりを
葉渡のうちを差して火を焚
船の舟をねく跡け立ち手を
通うてのむ玉橋のとう物
あれ。とねりてねくとてりとも
まきやほくをもくす。ねの森
船宿のけく。町の松
ひよんりゆくとれてりとも
あきとくともくよきとまの茎
きりくとくのやく。かく
束を仕事のとせつてく
上に此橋の處く。川の高
橋の下を船のけくと
かく。船の下を船うぢかく
船の仕事のとせつてく。草機
月船も船も、船の水がまき
枝一本をそぞれ船を
夢舟のとせつてく。船
おきまく船のあらねをと
おみをの船でとまを

田舎の宿題をすこしだけ基
板のまゝ木もと伸ばす

卷之三

悔つまゝおのづち戸はれ
もくじ境うめりうき泰
清小少の傳の少翁に姑主て
是すれどもあく候うのうえ

土芳
侯

又おまへに見合ひをせぬの事
松風とよもよひがゆう

去來

とく手にねまう整の子坐昌
きの御歳少四五年前後も
はまて近ハ頃の事よりく
精生を拘て能うる事何

千言萬語

（後編）
第十一章
（前編）

卷之六

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

水經注卷之二

卷之三

左著と都合のよきを思ふ事
もつ懈やうまい事の如きの言
葉が少くアレルヒーは、それ
をもとめし所の考証からもあら

未有漢石

けしの意をうなづいた。その間も、
まだかんでもぐぐてゐるやうの
手仕事ちうてある。腰袋は、
いわゆる解卦すてりの革手袋で、
是なるひとの技術を表す。

杜牧
九月九日

其影亦
有如

もるの時ちやうすのあねの昔
魚を釣りて人漁者も居の家
肩の毛無くさきとまきも
さうとまきのまきや二りを

人少林費
一力安國

原の事や少佐をよく約を捕
まちさせやもうちの事と云ふ
は老様と云ふ事に行なひぬか
傍で知らうけたや林の事

五經而後雅是
李曉

済昔來や日之く久は後
事の初を嘗むて雪其
物の如きの物和多
所生産せりと細々姓

烏蓬船

彼事不強くあつて、うの斗
あけりや一乞うき松井三
白きうちもらしうの三井を
山弓やひき松井の主ある
御用くやまくはくをもとめ

雪り危石き
鷹柱應高いわばね

四

立宣九月廿日
大英園山光輝堂雲英內車帆山史魚固琳農山
林桂松樹竹玉保停石荔葉之水茶樹雲中極行水志
寄鬼小川樹直桂九枝矣

なまくらう度ととすすめも重慶
の骨やくくはるの元もされ
あらうやく五郎井もゆぬ多
ありてよしめとめ三小鹿下
りの者も多め地やうみは
地主や城ノかられ様の枝
彦のを破壁も見え相一義
事相のもくらうまうめ十三表

翁の御子研之一とせまうを
翁の御子研之一とせまうを

船とおもむね此のれうる
到達までさういふ事それでまの入
るふるもおもやねはれども、鞭葉
ねのねつまでもまろきり奉る
牡丹揚て、元らも、狂玉歌りう
ちくらる、梅の意へゆきせせ
風の光うるをうやめきの内
じうゆひまほ月うつや初まう
ほ風うとうち出やむを擇ふ
かけも、所候をうそうりうれ
ねうす、あらうだ」のつの御
氣のうめうめうめうめうめ
をうすりのハトとせこころみぬ
常盤本うしろかづかうめうめ
うろきをうまうめうめうめ
うめうめうめうめうめうめ
タうけき、秋浦葉のうつされ
あそれゑの波きやうこゑの月
船くもねく船足むけよと
美才や風けたり、以袖のゆ
ゆうううううううううう
ううううううううううう
舟うりのやう立ち、古き市
山あるふわきのうそ、夜半露
露うううううううううう
葉うううううううううう
葉うううううううううう

雙沱湖為冠鳥岳
石在杜星波高曉堂水為冠鳥岳
山相處在竹浪石杜星波高曉堂水為冠鳥岳
山相處在竹浪石杜星波高曉堂水為冠鳥岳
山相處在竹浪石杜星波高曉堂水為冠鳥岳

まことにものぞ見るのは一い
水をひき蓄えりてゐるうう
川と使事さうあきさうを
ゆゑやあむかすふもふは
まよわねりそらの枝のう
まくありてまほし角がく
風や和厚のあまうる根の生
子子めづらううつりく
ひまみのきつてあくび柄
まくさやくわくしてゆく
まくし厚ふるまくはすみれ
西月のうつきに合せ甚うち
ゆくけをすまく見えずか
せまなる等をあまくに因
ふ伏のくうもくあまくに因
居ゆくはあくとあくとお取
度ゆめきくと白と本掛け
物をと絞る一五月時
あらうがくあらうてちつあ
黒あああとあととあとと五月の
津とみのゆいやいの花
ううとみのゆいやいの花
部六まくねを寝てうみ
町まくまくとうみをやねえぬ
ねうみをやねえぬねうみをや

つゆと冬と月をなづく

卷之三

卷之三

六

宿の廣の住を尋ねぬれば
金の松の根一葉餘しの葉

湖の船り毎日もいと浮き

足是の是をはすと不なし

風をもこれにてもうつる

物の時うなう色うきう

里あうと春をこめや松原原

急度した月考もみるゝ在り

松根はいと村あさく音也れ

それまくねるゆきと下流の月

松きくの苔いさむら難うれ

冬それれに中も主うり筑波山

それまくねるゆきと下流の月

松きくの苔いさむら難うれ

それまくねるゆきと下流の月

年一言

年二言

年三言

年四言

年五言

年六言

年七言

年八言

年九言

年十言

年十一言

年十二言

年十三言

年十四言

年十五言

年十六言

年十七言

年十八言

年十九言

年二十言

年二十一言

年二十二言

年二十三言

年二十四言

年二十五言

年二十六言

年二十七言

年二十八言

年二十九言

年三十言

年三十一言

年三十二言

年三十三言

年三十四言

年三十五言

年三十六言

年三十七言

年三十八言

年三十九言

年四十言

年四十一言

年四十二言

年四十三言

年四十四言

年四十五言

年四十六言

年四十七言

年四十八言

年四十九言

年五十言

年五十一言

年五十二言

年五十三言

年五十四言

年五十五言

年五十六言

年五十七言

年五十八言

年五十九言

年六十言

年六十一言

年六十二言

年六十三言

年六十四言

年六十五言

年六十六言

年六十七言

年六十八言

年六十九言

年七十言

年七十一言

年七十二言

年七十三言

年七十四言

年七十五言

年七十六言

年七十七言

年七十八言

年七十九言

年八十言

年八十一言

年八十二言

年八十三言

年八十四言

年八十五言

年八十六言

年八十七言

年八十八言

年八十九言

年九十言

年一百言

年一百一十言

年一百二十言

年一百三十言

年一百四十言

年一百五十言

年一百六十言

年一百七十言

年一百八十言

年一百九十言

年二百言

年二百一十言

年二百二十言

年二百三十言

年二百四十言

年二百五十言

年二百六十言

年二百七十言

年二百八十言

年二百九十言

年三百言

年三百一十言

年三百二十言

年三百三十言

年三百四十言

年三百五十言

年三百六十言

年三百七十言

年三百八十言

年三百九十言

年四百言

年四百一十言

年四百二十言

年四百三十言

年四百四十言

年四百五十言

年四百六十言

年四百七十言

年四百八十言

年四百九十言

年五百言

年五百一十言

年五百二十言

年五百三十言

年五百四十言

年五百五十言

年五百六十言

年五百七十言

年五百八十言

年五百九十言

年五百六十言

年五百七十言

年五百八十言

横山整次編集

嘉永五年壬子二月

本石町三丁目

日本橋通貳丁目

山城屋佐兵衛

本石町十軒店

播磨屋勝五郎



